



目次

鈴木すみさん証言（13歳、高等女学校2年生、千葉市椿森）	43
千葉通子さん証言その1（8歳、国民学校2年生、千葉市院内町）	45
千葉通子さん証言その2（8歳、国民学校2年生、千葉市院内町）	49
千葉通子さん証言その3（8歳、国民小学校2年生、千葉市院内町）	51
木之本静枝さん証言（21歳、一児の母親、千葉市長洲）	54
泉崎謙一郎さん証言（12歳、小学校6年生、千葉市長洲）	57
吉田昭三さん証言（17歳、中学校3年生、千葉市長洲）	60
戸田鎮雄さん証言（15歳、航空工業学校4年生、千葉市院内町、元千葉県議会議員） ..	64
網岡壽江さん証言（当時3歳、旧千葉郡生浜町塩田、満徳寺）	65
松本郁子さん証言（7歳、小学生1年生、千葉市）	68
志位茂野さん証言（17歳、千葉師範学校2年生、寮生、千葉市）	69
三橋保さん証言（7歳、小学校1年生、旧千葉市蘇我町1丁目）	73
星野宏子さん証言（5歳、千葉市矢作町）	74
中村昇さん証言（20歳、工場労働者、千葉市椿森）	76
三橋とみ子さん証言（20歳、師範学校、寮生、千葉市）	82

鈴木すみさん証言（13歳、高等女学校2年生、千葉市椿森）

私は終戦当時13歳で淑徳高等女学校（現明德高校で、千葉市登戸の千葉県農協会館の場所であった）の2年生であった。その前は、東京都港区芝公園5-5（現東京タワー付近）に住んでおり、芝女子商業学校の生徒であった。この学校は、私は算盤が得意であったので、自分で選んだ。空襲警報は日常茶飯事に発令されていたので、午前中に解除されたら、午後から登校するが、午後解除された場合は、その日は登校しなくてもよいということになっていた。ある雪の日、12時59分に解除になった。私が登校をためらっていると、母は通行中の海軍将校を見ながら、軍人はあのように国のために戦っているのだから、お前も学校に行きなさいと諭した。学校で、私たちのクラスだけ3日間、軍の文書の宛名書きをやらされたことがあった。

1948年4月18日、東京発空襲があった。私は同年暮れに来襲したB25が日本軍高射砲に撃たれて錐もみ状態で品川方面に墜落していくのを目撃した。見ていた日本人は喜んでいて、1945年3月10日の東京大空襲で港区も大きな被害を受けた。私の地区の市電通りには愛宕消防署、愛宕警察署があった。私の隣はアメリカ人経営者のアンドリュースさんの家、車庫、藤棚が残っていた。私はこのアメリカ人と面識も無かったが、アメリカ軍は元アメリカ人の住宅を爆撃しないことを期待していた。3月9日の夜10時ごろ、警戒警報が発令されたが、「東部軍管区情報関東地方警戒警報解除」（京浜地区という場合もある）と放送した。そのすぐ後で、バリバリと言う何かがぶつかるような音がした。防空頭巾を持って、向こう3軒両隣約20人の隣組組長が避難指揮をとった。芝公園の防空壕は鉄道官舎が占領していたので入れなかった。次に公園グラウンドの横穴防空壕へ向かったが、私の家族は単独行動を選んだ。空襲警報が解除になって、2km先の巴小学校方面を見ると空は真っ赤であった。消防署の火の見やぐらも燃えていた。私達の住んでいた地区だけが約30戸と日赤博物館が焼け残ったのである。その後、4月5日、5月下旬に空襲があったが、この地区は焼け残った。母は3月10日の大空襲の前から「空襲は大丈夫だ。疎開しなくてもいいよ」と呑気なことを言っていたが、それが本当になった。ただ、焼け出された同級生が疎開して行くのが寂しかった。

空襲の激化に備えて、我が家も1945年5月に母の実家の千葉市に移転した。6月10日はじめの千葉市大空襲の日、6月10日は、農繁期休暇で私は千葉市椿森の自宅にいた。ブアン、ブアンと言うすごい大きな音がした。千葉鉄道機関区へ行って見ると、土がえぐれた大きな穴（直径4m×深さ2m）が一つ見えた。死傷者は見えなかった。爆弾の威力に恐怖を覚えた。しかし、すぐ近くの千葉師範学校女子部の爆撃は知らなかった。

7月7日の二回目の大空襲は、7月6日夜半10時か11時ごろ警戒警報が発令された。私は服を着ながら、家族を起こした。母は幼子を連れて避難した。父は大事なものは持っていくよう注意を与えた。私は姉、父とともに家を火災から守るために家に残った。家には井戸がなかったので、隣家の井戸を借りて3杯のバケツに水を満たした。私の家の屋根に1発の焼夷弾が落下したが、父は火はたきで地上に落とした。それが隣家の敷地であったので急いで鎮火させた。千葉のおじさんがやってきて「焼夷弾がたくさん落ちれば消せないから逃げよう」と説得に来た。しかし、父は「家が焼けたら住む所なくなる。家を守るべきだ」と逆に説得した。千葉市の中心街は真っ赤に燃えていた。鉄道連隊も木造の兵舎が焼け、兵隊の死体が2-3体横たわっていた。明け方、雨が降ったので布団がぬれた。夜が明けて母と幼子が戻って来た。家族が無事再会でできて嬉しかった。前日に研いであったご飯を炊いた。空襲後も町を見るのが怖くて外出しなかった。しかし、近所の小学生で10歳ぐらいの女の子は焼夷弾の直撃を受けて死んだ。また、いとも逃げる途中に右足を負傷した。焼夷弾は親子弾であり、落ちた瞬間に親の方がくるくる回りながら、子の方を振り落としながら落ちてくる。家の庭に落ちたのも、女の子に直撃したのもその子弾であった。

8月15日の天皇の終戦放送の後も怖いことを経験した。友達と海にアサリをとりに行った。海に入ってアサリをまさぐっていると、警戒警報になった。艦載機が私達をめがけて機銃掃射を始めた。私達は急いで海に潜ったが、機銃弾が水面に落ちるときにできる水しぶきを見た。終戦が第一線のパイロットに伝わらなかったのか、それともパイロットがいたずらをしたのかわからない。いずれにしてもひどい話であった。

学校は9月に再開された。

少し古い話では、5歳の私は東京で2-26事件（注）に遭遇した。1936年2月25日は雪が降った。父は私のために雪だるまを作ってくれた。翌日、雪はやんでいた。車は雪のために走行できなかったが、市電が走っていないのは不思議であった。まわりは人が騒いでいる。やがて、1年生の兄が下校してきて「周りに兵隊がいっぱいいる。先生は学校に来なくていいと言った」と報告した。およそ1年後に2-26事件で処刑された安藤大尉らの写真を掲載報道した日日新聞を父は保管していた。この日の報道姿勢はどっちつかずのあいまい姿勢であった。私はその新聞を学校に持って行って話したことがある。

長兄一朗は召集されたが、戦場に行かずに肺結核に感染した。福岡陸軍病院で戦病死した。千葉駅で切符を買うこともできず、家族は見舞いに行くこともできなかった。その後、兄のことは何も手続きがされなかった。戦後20年たって、私が浦安の葛南病院に就職したとき、元自衛隊の病院の看護婦長から国のために死んだ軍人は厚生省に申請することを勧めてくれた。東京都広報誌を見

て照会すると、都側から「鈴木一朗さんですね。まだ手続きがされていません」と確認が来た。急いで、姉が勤めていた千葉県担当部局（留守業部）に申請した。窓口は冷たく証拠を出すように求め、なければ無効だと言った。私は担当者に向かって「あなたより若い兄が国のために死んだのだ。あなたは、遺族にどんな方法で連絡したと言うのか」と問い詰めると相手は黙ってしまった。姉と相談して、陸軍病院発行の肺結核診断書を入手した。それで、慰労金と軍人恩給は支給された。恩給は10年間で40万円と言う低額であったが、ようやく兄の死が公に報いられた。兄の恩給は毎年6月15日に郵便局に受け取りに行く。

東京の学校で音楽の女教師は素敵な先生であった。軍歌を教えず、唱歌を教えた。あるとき、先生に偶然会ったが、声を掛けそびれてしまったことを今も後悔している。

戦争は二度としてはならない。

(注) 二・二六事件 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

1936年(昭和11年)2月26日-29日に、日本において、陸軍皇道派の影響を受けた青年将校らが1483名の兵を率い、「昭和維新断行・尊皇討奸」を掲げて起こした未曾有のクーデター未遂事件である。事件後しばらくは「帝都不祥事件」とも呼ばれていた。大日本帝国陸軍の派閥の一つである皇道派の影響を受けた一部青年将校ら(20歳代の隊付の大尉から少尉が中心)は、かねてから「昭和維新・尊皇討奸」をスローガンに、武力を以て元老重臣を殺害すれば、天皇親政が実現し腐敗が収束すると考えていた。彼らは、この考えの下1936年(昭和11年)2月26日未明に決起し、近衛歩兵第3連隊、歩兵第1連隊、歩兵第3連隊、野戦重砲兵第7連隊らの部隊を指揮して、岡田啓介(内閣総理大臣)、鈴木貫太郎(侍従長)、斎藤実(内大臣)、高橋是清(大蔵大臣)、渡辺錠太郎(陸軍教育総監)、牧野伸顕(前内大臣)、後藤文夫(内務大臣)の殺害を図り、斎藤内大臣、高橋蔵相、及び渡辺教育総監を殺害、また岡田総理も殺害と発表された(但し誤認)。その上で、彼らは軍首脳を経由して昭和天皇に昭和維新を訴えた。しかし軍と政府は、彼らを「叛乱軍」として武力鎮圧を決意し、包囲して投降を呼びかけた。反乱将校たちは下士官・兵を原隊に復帰させ、一部は自決したが、大半の将校は投降して法廷闘争を図った。指導者16人が死刑になった。

千葉通子さん証言その1 (8歳、国民学校2年生、千葉市院内町)

私は当時、千葉市院内町(現、中央区)の千葉神社の近くに住んでいた。院内国民学校2年生であった。私は、日中戦争の始まった1937年(昭和12年)

に生れ、もの心ついた時は戦争一色であった。

私が院内国民学校（現在の院内小学校）へ入学したのは1944年（昭和19年）であった。すでに日本本土への空襲は本格化しており、登下校は部落毎に6年生が班長のもとに集団で行動し、空襲警報のサイレンが鳴ると、その場で道端に伏せて、アメリカの爆撃機B29の爆音が遠ざかるのを待って移動した。授業の途中でも急いで教科をまとめ校庭に集合して班長の指示に従って行動した。学校には必ず天皇、皇后の写真を安置した奉安殿(注)があり、この前の廊下を走っていても、急いで立ち止まり、最敬礼を強要された。国民学校の授業は、国語はヨミカタと言われていたと記憶している。「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」「ヒノマル、ハタ バンザイ バンザイ」「日本ヨイ国 キヨイ国 世界ニヒトツノ神ノ国 日本ヨイ国 強イ国 世界ニカガヤク エライ国」と教えられた。ワタナベサンガグンカンノエヲカキマシタ。私が描いたはつきり覚えている絵は、1枚の画用紙に小さな家、その脇に家より大きな赤いチューリップと太陽、そしてネズミ色の戦闘機を必ず描いてあった。みごとな軍国少女の絵であった。音楽では「僕は軍人大好きよ、いまに大きくなったならお馬に乗ってハイドウドウ」と歌った。私より上級生は修身で「木口小平は死んでもラッパを離さなかった」と教えられていた。作文で「お父さんが戦争に行つてさみしい、死なないで早く帰ってほしい」などと書くと「天皇のために命を捧げる」と書きなおさなければ、認められなかったと聞いた。

父は赤紙1枚で中国の海南島に海軍として召集され家には祖父母と母子6人の暮らしであった。

6月10日、朝7時45分、日立航空機工場目がけて爆撃したが、爆撃目標はそれと隣接の蘇我1丁目を直撃した。一瞬家並は消え、すり鉢状の穴と瓦礫の山に死体が散乱し、この地区だけで142人が死亡したと聞いた。そのまま北進したB29は現在のJR千葉駅周辺にあった学校工場である県立千葉高女と千葉師範女子部並びに千葉鉄道機関庫一帯を爆撃した。爆撃の瞬間、あらゆる物が碎け舞い上がり夜の闇に戻った状態だと言われている。

私は7月6日、着のみ着のまま寝床に入った。いつ空襲で起こされるかわからないので、当時は寝巻き(パジャマ)などに着替えることはなかった。灯火管制だから、夜になって外に光がもれないように、電灯は黒い布で覆われていた。空襲警報で起こされて間もなく、外で「火の手があがったぞー！」と言う叫び声がした。母は0歳の妹を背負い、私と弟を両手でシッカリと握り、私も必死で母にかじりついた。すでに周辺に落とされた焼夷弾で焼かれている明かりが、私たちを照らしていた。母はおそらく焼夷弾の落とされていない方を目ざして避難したのであろう。細い路地は避難する人であふれ、人波で流されるまま、院内国民学校前に押し出された。爆弾や焼夷弾が投下されて、市街地は、たち

まち火の海となった。院内国民学校は焼夷弾ですでに燃えさかり、国民学校前の道をはさむ周囲の家々は炎に包まれ、家の骨組みが赤く焼けていまにも、くずれ落ちそうになっていた。そんな炎に照らされた道路は幅 6m ぐらいであった。ここに爆弾で直径 2・3m 路面がえぐられ、その被害で命を落としたのであろう黒い人影が横たわっていて、それらを避けながら院内国民学校の斜め裏の田圃へ避難した。すでに多くの人でいっぱいであった。私の後輩はB29の爆音がするとぬるぬるした田圃の中に押し込められた。千葉空襲は7月7日未明、2時間半に及んだ。そして一晩で家も何もかも焼失した。幸いこの場所は攻撃されることもなく、恐怖の一夜を明かし、B29の来襲もなさそうなので、夫々が重い足を我が家へと運び始めた。

学校の校舎は跡形もなく、どこもここも廃墟となりくすぶる瓦礫の山であった。見渡す限りの焼野原になってしまい、家のあった場所を特定することができなかった。焼け残った千葉神社の石塀と、くすぶる本家の土蔵で家の位置を確認した。

お風呂場に吊るしてあった玉ねぎがむし焼きになっていた。防空壕にあった非常食用の大豆が瓶の中で炒豆になっていて、これらで空腹を凌いだ。隣の鈴木フジオちゃん（5歳）は防空壕で母親とともに焼け死んでいた。そのうち、大豆入りのおにぎりを積んだリヤカーが来て、被災者に配られた。当時5歳の弟の記憶によるとカラの焼夷弾が焼けて黒くさびたまま井戸端のところにしばらくあった。ねぐらを求めて千葉大学病院下亀岡町の叔母の家を頼る手前の都川には、焼夷弾で火傷し、傷ついた体に水を求めた人たち（人数、死に様、年齢）の屍が折り重なる（どのようにかさなっていたのか）凄惨な光景は、まさに地獄絵そのものでした。そして、防空壕で焼死した隣の男の子を目の当たりにしたばかりの幼な心には、あまりにも衝撃的な光景であった。

叔母の家は、家を焼け出された親類でゴッタ返していた。間もなく西登戸の親戚を頼って行ったが、ここも例外ではなかった。やがて秋田県横手市の母の実家へ疎開することになった。何日もかけてようやく切符を手に入れたのであった。そして汽車に持ち込んだ布団袋の上に私は乗せられていたが、積み下ろしは、おそらく周りの人々が手伝ってくれたのであろう。汽車は田舎に着くまで空襲警報で何回も停車し、かなりの時間を要した。やがて、横手駅に着くと人力車に布団袋を積んで私はその上に乗せられて叔母の家へと向かった。

母の里に落ちつくまでに2週間くらい住むところを転々としていた。私が国民学校に転校した学校では“東京から来た子”としていじめられ、いくら千葉から来たといっても東京から来た子であった。文房具も不足していた。当時、お習字の教科書は裏が白紙なので、いとこがきれいに線を引いてノートとして使えるようにしてくれたが、私は「それはいやだ」といってダダをこねて泣い

た。近くを流れる小川は子どものよい遊び場であり、空襲の恐ろしさを忘れさせる、のどかな空間であった。

私はいまでも胸を痛めるのは、戦争中で食料は極端に不足していた時代だったから、いくら母の実家とは言え、食卓は別であった。いとこたちは白米を食べており“こび”とっておこげをお代わりしている。私たちは米粒とキャベツ（当時、玉菜と言った）の青い葉の浮いている雑炊をすすっていた。当然母のお乳は出ないので赤子の妹には雑炊の汁を飲ませ、弟も私も“こび”を食べたいと言った記憶はない。後に弟は「秋田のおばあちゃんは、外孫を歓迎してくれなかった。普通だったら孫は可愛いものなのに……。伯母さんはかくれて、いとこたちにおやつをあげていた」と言った。この時代いくら親類といっても「やっかい者」だったのだ。しかし、伯母やおばあちゃんが決して悪い人ではなく、戦争と言う時代だったのだ。私が母親になって、当時の母の気持も理解できるようになって、母はどんなに辛い思いをしたのだろう。「白米のご飯を食べたい」と言わない幼な子をどんなに愛しく思ったことか、その時の気持がいたい程わかる。

やがて夏休みに入り、飛行機の爆音もない青空のひろがる 8 月 15 日お昼頃に隣の家のラジオがボリュームいっぱいに一雑音がひどい—終戦を告げる放送があった。幼な子には、その意味が理解できなかつたが、私は本能的に戦争が終わったと感じとった。家の中もシーンと静まり返り、おそらく大人たちは隣の家でラジオを聞いていた。子供心にもう B29 は来ないという安堵感でいっぱいであった。

やがて、千葉の祖父が「バラックを建てたので、千葉に帰って来い」と迎えに来てくれた。なつかしい千葉では祖母が迎えてくれた。

（編集委員注）

奉安殿（ほうあんでん）とは、戦前戦中にかけて各地の学校で、天皇皇后の写真（御真影）と教育勅語を納めていた建物のこと。御真影自体は大正～昭和期にかけて下賜されたため、奉安殿の成立もその時期と推測される（小学校の奉安殿建築は昭和 10 年前後に活発化）。また学校への宿直も、この御真影の保護を目的として始められた面もある。四大節祝賀式典の際には、職員生徒全員で御真影に対しての最敬礼と教育勅語の奉読が求められた。また、登下校時や単に前を通過する際にも、職員生徒全てが服装を正してから最敬礼するように定められていた。当初は講堂や職員室・校長室内部に奉安所が設けられていた。しかしこの奉安所の場合、校舎火災や地震などによる校舎倒壊の際などに御真影が危険に晒される可能性が高く、また実際に関東大震災や空襲、校舎火災の際に御真影を守ろうとして殉職した校長の美談がいくつか伝えられている。昭和 20 年 12 月 15 日、GHQ の神道指令のため、奉安殿は廃止となった。奉安殿の

多くは戦後解体・もしくは地中に埋められ、御真影も全て奉還された訳ではない。しかし、解体を免れた奉安殿は現在でも全国各地に少数ながら残っている。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

千葉通子さん証言その2 (8歳、国民学校2年生、千葉市院内町)

戦後の義務教育を体験にもとづいて記述する。

(1) 小学校について

終戦直後の院内国民学校は跡形もなく焼失し、私たちの学校は軍の施設が利用された。現在の中央区椿森 4-1-2 の国立病院機構千葉医療センター（元陸軍病院→元国立千葉病院）に隣接する旧鉄道第一連隊兵舎の一部が焼け残っており、ここを仮校舎として戦後の小学校がスタートした。

1947年（昭和22年）4月6・3制の施行により校名は千葉市立院内小学校改称された。

焼け跡のひろがる鉄道連隊跡の広場は、空襲のないのどかな空間であり、ナフ跳びやゴム跳びなどで子どもたちの声ははじけていた。雨の日の休み時間は廊下でゴムまりつきや、教室でおはじきなどをして遊んだ。そんなひと時も束の間、1948年（昭和23年）3月にこの仮校舎が火災で焼失してしまった。そのため学校全体が分散され、5年生になった私たちは旧気球連隊の格納庫が教室となった。現在もこの格納庫は残っている。稲毛区作草部町の川光倉庫が会社の倉庫として利用している。とにかく気球の格納庫なので天井はものすごく高い。教室は床にベニヤのような材料で仕切ったもので、隣の授業はつつぬけであったから、授業にならないのだ。先生も苦労されたと思う。天気の良い日は外での授業、青空教室であった。

新校舎の建設は急ピッチで進められたが建築が間にあわず戦後初期の講堂（体育館）の建設は旧陸軍下志津飛行場の格納庫の鉄骨を基礎にしたことを後に聞いた。院内小のほか、新宿小、本町小とのことである。それが戦後13年たった1958年（昭和33年）によりやく体育館が落成したのである。私たちは、5年生頃になって新校舎で勉強することができるようになり1950年（昭和25年）小学校を卒業した。

(2) 中学校について

義務教育6.3制の施行により新制中学は市内に7校開校した。私は1950年（昭和25年）千葉市立第4中学校に入学した。戦後5年ぐらいて過ごしていたが第4中という学校校舎があったわけではない。

私が入学する1年前に、それまで別々の建物で分教していた学校がようやく

全校生徒が同じところで学習できるようになったと聞く。それが現稲毛区轟町の元陸軍兵器補給廠(しょう)であった。現千葉公園、競輪場前道路は軽便鉄道の軌道敷があり、この線路伝いに通学した。敷地 3600 坪、建物 600 坪、これを改装したという。しかし運動場はなかった。せいぜい棟と棟の間でキャッチボール位しかできない状況であった。教室となった倉庫は建物の端に 5~6 段の階段があり、コンクリートの廊下が屋根なしで延びている、そこに教室が並んでいた。

生徒に学校の方針を伝えるにはこの一段と高い廊下に先生が立ち、生徒はその下の地面に集合した。倉庫を改造した教室はコンクリートの床、窓にガラスなどない吹きさらし。冬の風の強い時はまさに冷凍室での授業だった。ストーブなどあるわけがない、入口は頑丈な角材でできている格子戸で、子ども一人では開け立てできなかつた。教室には電気もなかつたように思う、うす暗い教室はまさに倉庫。人間の学習する環境には程遠いものだった。後年、先輩に聞くところによると教室の天井から兵器を格納するための錨がぶらさがっていたという。

周囲は兵器の残骸があちこちに残されたままになっていた。この兵器についている真鍮や鉛を取り外して鉄屑屋に売り小使銭をかせいだ。私も登下校の時そんなものを拾ったりしたものだ。

真夏の日よけに、花模様のついた唐傘を母が買ってきて登下校の時にさしたことを思い出す、休み時間の遊びといえぱおしくら饅頭や馬乗りなど、体を動かす遊びで寒さをしのいだ。先日亡くなられた緒方拳(明伸)は私と同学年。椿森中 30 周年記念に寄稿している。「戦災で新宿の家を焼け出され一家で千葉市へ。たどりついた家というのは旧陸軍兵舎の医務室あと。クレゾールとカビの強烈な臭いが、さして気にならないほど“家”というものは有難いものでした。……作草部(現稲毛区)というところは、丸型と角型の巨大な格納庫があり旧陸軍の戦車がゴロゴロし、田んぼと畑、藁葺の農家が混じり合わせてあり奇妙なアンバランスが同居しているところでした——」

こんな劣悪な教育環境を解消するため先生方も市当局も努力したであろう。なんと、かつて院内小の仮校舎であった旧陸軍鉄道第一連隊の一部が校地として決まった。現在の椿森中(中央区)のあるところだ。新校舎建築の時に不発弾が出てきたという話を聞いた。

1950 年(昭和 25 年)5 月に第 1 期工事が落成し、2~3 年生が新校舎へ移転、1 年生の私たちは、翌年の夏まで、うす暗い牢獄のような教室でがんばったある同級生が、どこでかは聞かなかつたが、不発弾で片手を失った。1951 年(昭和 26 年)には市立椿森中と改称された。校庭内には 12 坪の弾薬庫が残されたままで大蔵省への取壊しの陳情もなかなか許可されなかつたと聞いた、ともあれ校

庭も出来て運動会やスポーツも盛んとなり野球部は市内中学では強かった。部活動も活発になり私は書道部でよい先生に恵まれた。

中学生になってチョッピリ大人になった気分で、当たり前前に学習できる環境を謳歌していた。そしてこの時期、大方の家は貧しかった。私は健気に家計を助けようと就職を希望していた 1953 年（昭和 28 年）の春であった。

千葉通子さん証言その 3（8 歳、国民小学校 2 年生、千葉市院内町）

亡き父の証言にもとづいて戦中、戦後の生活について記述する。私の父親は 1926 年（大正 15 年）高等小学校を卒業すると、東京本郷の K I 洋服店に丁稚奉公に出た。洋服仕立の仕事は、直接教えてもらうことはできず、見よう見まねでおぼえたという。大学が近くにあったので、学生服の仕立てを主にしていたようだ。待遇は悪く、いつやめてもいいと思っていたので、20 歳の徴兵検査を機に千葉へ帰った。結果は丙種で当時は兵役の義務はなかったのでよかったと思ったそうだ。甲種合格だったら、すぐその年鉄道連隊等へ入隊だったろうといていた。まもなく仕立ての下職として、自宅を仕事場にして生計を立てた。

当時警察官の初任給が 36 円の時代、洋服一着 12~13 円もしたので仕事も減っていき、暮しも立てられなくなっていた。そんな時知人の紹介で 1939 年（昭和 14 年）逓信省（郵政省の旧称）に就職した。しかし、日給 1 円 20 銭では生計が成り立たず、帰宅してから仕立ての仕事をして不足をおぎなった。

そんな父にも 34 歳の時、市役所の小遣いさんが赤紙を持って来た。この時、水とアルコールを混合した酒一升が配給になったという。1944 年（昭和 19 年）8 月 1 日横須賀海兵団に入団した。出征兵士を日の丸の小旗をもって千葉駅まで送るのだが、父については記憶が全くない。当然千人針も赤い糸玉を結んだ木綿の晒しをお腹に巻いたものと思われる。千人針とは、出征軍人の無事を祈るために、千人の女性が一針ずつ糸玉を縫いつけて送ったお守りの腹巻のことである。

千人の人々の糸玉を縫いつけるので、私たち子供まで街頭で協力したことも思い出す。私が、物心ついた頃は、こうした戦時色の中にあつた。国民のくらしは、すべて戦争協力態勢に組みこまれており、これに批判的な人は非国民として告発され、家族はもとより親類縁者まで類が及んだ。

8 歳の子どもに刻み込まれた標語は「欲しがりません勝つまでは」「贅沢は敵」「パーマメントはよしましょう」子どもまでモンペを着せられていた。こうした時の政府の方針に反する行為を隣組が互いに監視するシステムになっていた。

「とんとん とんからりと 隣組、格子（こうし）を開ければ 顔なじみ、廻して頂戴（ちょうだい）回覧板、知らせられたり 知らせたり」という歌まで私は、覚えている。

隣組（今の町内会）が防空演習などを行う。竹やり訓練、清掃用具のモップのような火消し竿。防火用水（天水桶）はどの家の門口にもあった。いざという時のバケツリレーの水であったのだろう。防空演習に出られない事情のある人でも情け容赦なく、強制された。鍋釜など金属類の供出は全国民に義務づけられたことなど、子供心にも記憶に残っている。日本は資源が乏しく兵器の材料が不足してのことだと説明されていた。子どもたちの遊びはめんこ、ビー玉、戦争ごっこ、看護婦ごっこであった。食料も不足して、切符で隣組毎に購入した。今でも鮮明によみがえるのは、近くの和菓子屋へ10銭をもって1本のみたらし団子を買って食べたことだ。とてもおいしかった。終戦の前年も末になると、常に空襲警報に怯えていた。燈火管制と言い電球を黒い布で覆い、その下だけ明るくまわりは薄暗いのだ。その時の私の家のトイレは勿論旧式だが電気がなく、夜、真っ暗なトイレの使用がとても恐ろしく怖かった。防空頭巾は肌身離さず、肩から斜にかけ、母親が「市役所に行ってくるからお留守番」といわれると母親が帰宅するまで不安で仕方なかった。家の庭には植木がたくさんあり、祖父が手入れをしていた。それがいつの間にか植木がなくなり防空ごうが出来た。それは非常食等を入れる程度のものであった。空地には家庭菜園をつくり、自給自足できるものを努力していたのだ。

私は、家の主（アルジ）が出征したあとの家族のくらしは、どうだったのか大変心配だった。通信省より生活費はでていたと父は話していたが、自営業等の家族はどうしていたのだろうか……。いずれにせよ、私たち家族は父が出征し、家は空襲で丸焼けとなり、すべての財産は失ったが、父も復員し家族全員が無事であったことだけは、運が良いとしか言いようがない。

戦後のくらしはどうであったか。終戦後まもなく焼け跡に一家そろってバラック住まいが始まった。焼けトタンの屋根で天井板もない、粗末な梁がそのまま、釘の穴はあいたまま、雨が降ると洗面器で雨もりを受けた。畳は荒ムシロだ。6帖と3帖の狭いバラックに7人の家族だ。トイレは大きな瓶（カメ）を土に埋め、細長い板を2枚渡したもので、トイレトペーパーは新聞紙だった。

ひもじくても、何もなくても平和なくらしは子どもでも、希望に夢をふくらませていた。

太平洋戦争のために政府は、すべての資源など国民から収奪し食糧等も軍隊優先、国民は配給制度で極度な食糧不足を強いられ、それは終戦により更にひどくなった。

私は子供心に空襲警報がなくなり、燈火管制もなくなり、精神的には大きな希望を抱くことができたことがうれしかった。しかしすべての物資が不足し食糧難で、国民の大半は貧しく栄養失調で、どの子もアバラ骨がでて、お腹が異常にふくらんでいた。頭や顔のどこかに通称“おでき”という皮膚病にかかっている子も多く見られた。石鹸がなく、行列で手に入れなければならず、それとても、日常生活で清潔な暮らしには届かず、着ている服も垢だらけ。焼け残った銭湯に遠い道のりを経てたどりつき、そこは、いも洗いと大人たちが表現していたくらい、大混雑であった。浴槽のお湯は、まっ黒でドロドロしている状態。今の常識では、とても想像できないかもしれないが、他にないので誰もが利用した。従って、ノミやシラミに血を吸われた。シラミは頭にいるのは黒く、体にいるのは白く、シャツの縫目にいた。退治の仕方として熱湯で衣類を消毒する。学校では白いDDTの粉を頭から振りかけられた。それでも不潔なので、ノミやシラミはすぐに体に住みつくのだ。主食はさつまいも。7人家族の私の家で、さつまいも1俵の配給。今のさつまいもは種類も豊富でおいしいが、配給のさつまいもは、オキナワとか農林1号というもので、これがとてもまずかったが、空腹には勝てない。準主食的なものとして肥料用の海藻や家畜のエサにする澱粉のカスを食料品に加工したもので、ドンニク餅といった。とても臭くて食べられるものではなかった。(ネズミ色、20 cm×5~6 cm位で3~4 cm位の高さで平たいカマボコ型で板付ではない) すいとん(小麦粉をだんごにした汁)は常に塩味であったがさつまいもやドンニクもちよりましであった。砂糖が入ったすいとんは美味しかったが、めったに砂糖はなかった。どこの家でも空地に野菜を作った。ジャガイモ、さつまいも、カボチャ、トウモロコシ等収穫は私たち子どもも手伝った。少しすると、玄米が配給になり、一升ビンに玄米を入れて細い竹の棒で精米をすることを手伝った。それでも雑炊だった。わずかの米を何回にも分けて水でお腹をふくらましていた。ごはんが食べられるようになって朝食の玉子は兄弟で半分に分けた。おやつのはちまみは1日2個ずつ、近所で少しゆとりのある家の子は、ドンドン焼き(小麦粉を水でといてフライパンで薄く焼いたもの)を食べていたり、七五三の飴のような棒状のいも飴を私の口に近づけて、からかわれたりしてくやしかった。やがて学校給食が始まり、脱脂粉乳のミルクは、ツブツブが残っていてまずいものだった。干リンゴと干ブドウは、私にとって最高のご馳走だった。戦後の食糧難と一言でいったりするが、どこの親も自分の食べるのをひかえても子どもには、少しでも食べさせようと苦勞を重ねたことは、私たちの想像を超えるものがあったと思う。

ある時、今は亡き母が幼い私に「お父ちゃんが帰ってこなかったら、お前たちを帯でつないで海に飛び込もうと思った」と云った。

どこの家でもそうであったと聞くが、母の着物が消えていく、戦争中、本家の土蔵に預けておいた、ミシン、箆筒等は空襲の翌日、くすぶる土蔵から火事場の底力で、祖母と母とで担ぎ出したものだ。その着物が貧しい食物に変わった。父は洋服仕立をしていた。父の背広を私のオーバーに仕立て直してくれたが、胸ポケットの切口をふさいだミシン目がそのまま残ったもので、それがいやで仕方なかった。親の愛情を理解できる年ではなかった、…。他に着る物もないし。

戦後間もなくの新聞には、尋ね人の欄があった。前線で戦った兵士の行方を尋ねる人。空襲で離ればなれになった肉親や親類、友人をいろいろな手段でさがす、その大きな役割を果たしたのが新聞であり、ラジオの尋ね人の時間だ。これと前後して戦災孤児施設のラジオドラマ「鐘の鳴る丘」は娯楽のない時代、楽しみに欠かさず聞いた。

娯楽といえば紙芝居も楽しみで、学校帰りのタイミングがずれると、いつものところから次へ移動してしまい、後を追った。正義の味方黄金バット、孫悟空等、続きものなどで毎日欠かさず見たかったのだ。 私たちが見た紙芝居のオジさんは、トランペットで“紙芝居が来たよ”と知らせたのだ。ただし、割り箸にからませた水飴を毎日買うことはできなかった。聞いたことがあるが、買わない子には紙芝居を見せないという、オジさんもいたようだ。私たちの、オジさんはそんな差別はしなかった。

戦後の通学は、ほとんどの子が、下駄であった。雨や雪には、高歯（あしたとも云った。下駄歯の高いもの）で雪の時の通学は高歯の歯の間に雪がギッシリとつまって、しまいにはコロコロして歩きにくくなり、転んだりした。下駄といえば、とても嬉しかったのはピンクの流線形の下駄を母が買ってくれたことだ。下駄全体がピンクの地色で花模様のものであった。いろいろやりくりして買ったものだと思う。父は本が好きで、幼い私や弟に「宝島」など寝る前に読み聞かせをしてくれたことは忘れられない。小学校の修学旅行は1949年（昭和24年）日光だったが、その時はたしか米2合持参だった。

この頃の世相は、戦前の巻き戻しがすでに強まってきていた。そんな時だったが、小学生の子どもにとっては、貧しくても純真に平和を謳歌していた。戦後の流行歌は「リンゴの歌」などにみられるように明るく楽しい歌であった。

木之本静枝さん証言（21歳、一児の母親、千葉市長洲）

私は1945年7月6日夜、千葉市長洲1丁目46（旧番地）の自宅にいた。私はB29の編隊が山梨県甲府市を攻撃しているとラジオで聞いて、千葉はもう大

丈夫だと思って、腕時計をはずして寝た。夜 10 時ごろ空襲警報のサイレンが響いた。起きるや否や空襲が始まった。2 歳児のおしめや洗濯物、たたんだ衣服を柳行李に詰め込んだまま、庭の植え込みに投げ出した。木の車の乳母車には米が入っていたのでこれも庭へ投げ出した。生活必要用品は焼失から守らなければならないと考えていたのである。

ついで、15 歳の妹、乳児をつれて自宅の防空壕へ入った。夫は千葉医科大学のレントゲン技官であったが、同時に大学の防空要員でもあったから、家族揃って避難ができなかった。夫は医療技術系であったが、自宅の防空壕の出来栄はよくなかった。踏み台を使って出入りした。空襲が激しくなってきたので、外の様子を見たら、近所の人誰も見えない。市内の中心部に住んでいる人たちが、リヤカーに家財を積んで家の前を避難していくのを見て、この空襲が規模の大きいものと判断した。家族を連れて亥鼻に向かった。そこには懇意にしている千葉医科大学 A 教授宅の防空壕があった。高德院の前を通り過ぎるとき、家の方面を振り返ったら、家の方面が炎上していた。あわてて避難する人が道路上に落としていったものをリヤカーで拾い集めている人も見かけた。途中、サーベルを下げた警防団が「落下した油脂焼夷弾を足で踏み消せ」と叫んでいた。私もいくつかやってみたけど、それで消せるような数ではなかった。夜半に雨が降ったので、火災は消えたと思った。

空襲が終わり、火災も下火になったので、A 教授の防空壕から出て、乳児の必需品を自宅にとりに戻ったが、母屋は完全に焼けていた。夫は早く家に戻り、1 軒の貸家は無事だと言ったけれど、他の 1 軒の台所から火が出ていた。私は急いで井戸のポンプで水をくみ出して鎮火させた。夫は気が動転していたらしい。逃げる前に庭に投げ出した柳行李は雨が降ったから濡れてしまったが、焼けずに無事だった。乳母車に入れてあった米も缶に入れてあったので無事であった。フトン、マクラ、蚊帳、タンスなどは千葉市五十土（いかづち）にある 64 歳の母の実家に疎開させるべく、牛車に積んで、牛の迎えが来るのを待って母の実家まで運んでおいたので助かった。そして、私の親類は誰も空襲に会わなかったので、布団などの差し入れてもらった。私は、借家に住んでいた C さんの奥さん（夫は軍医で渋川陸軍病院に単身赴任していた）と焼け残った借家で共同生活をするようになった。長洲は全部が焼けず、ボツボツとまだらに焼けた。共同生活をするために借家を母屋の位置に移動させて、廊下や部屋を増築して、母共に家族 5 人で戦後の生活が始まった。C さん夫婦は戦後、木更津で開業して、高額納税者になった。

私は、家の跡片付けに追われ、乳児を抱えていたので外を見て回るゆとりが無かったので、負傷した人、焼死体を見ることは無かった。都川河川敷では、艦載機の機銃掃射で亡くなった人がいたと聞いた。2 歳の乳児は飛行機が来る

と怖いと言って、外からヨチヨチ急いで帰ってきた。

日ごろの防空練習では、50人ぐらいがバケツリレーや、長いはたき棒で屋根に落ちた焼夷弾をはたき落とす訓練をしていたが、千葉市大空襲には全く効果がなかった。まず、日ごろ訓練を指揮していた人たちが逃げ出した。10年ぐらい前に、市役所より防災班をつくる話があったとき、当時の隣組に元役員に話す機会があったので、「空襲時にどうして、訓練をした時のように指導して下さらなかったのか？」と伺ったが、答えはなかった。

千葉市から戦災罹災者に500円が支給された。戦災者に毛布、うめぼし、お釜などが無料で支給されたが、本当に困っている末端の人までに届かなかった。また、千葉から東金に防空壕を掘りに動員されたこともあって、空襲直後に東金から戦災者にオニギリが差し入れられたが、やはり全員に届かなかった。途中でごまかす人がいて、不正が横行していた。あるとき、洋傘の配給があったが、私のところに来ないので、隣組に役員に理由を問いただしたら、「これからです」と言うたぼけた回答であった。横領がひどかったのが警察が手入れをしたこともあった。町会の役員は横領の疑いで逮捕された。しかし、警察官にも不正があった。ハマグリをもって来た知人が千葉駅で統制品違反持ち出しを警戒していた警官に、ハマグリを没収された。私は、その警官にハマグリは統制品でないことを抗議して取り返してあげた。もはや一億の国民が一丸となっていなかった。生活必需品の窮乏はひどかった。リヤカーがないので、イモの配給は本千葉まで荷車を引いて取りに行った。千葉大学B教授の奥さんが、安田屋の雑炊販売の列に加わっている姿は哀れであった。私は家族を養うために千葉市野呂へ米2斗(28kg)を求めて買出しに行ったが、没収されないように取締りが手薄になる正月を選んだ。

傷痕軍人で記憶にあるのは、いとこの隣家の兵士がハルマヘラ島の戦闘で、壕の入り口で爆弾を受けて左腕を失ったことである。さらに、その父は漁師であったが、舌癌で悲惨であった。戦時中、貧しい人は治療が受けられなかった。大学では、貧しい患者には有料の「施療患者」にせず、無料の「学用患者」に扱う善意もあった。

母は空襲後に千葉駅に降りて、千葉空襲の規模にびっくりしていた。戦後暫くして、アメリカ軍が進駐してきたが、5歳になっていた子どもは、海に向かって「アメリカのバカヤロー」と叫んでいた。戦後、市役所はバラック住宅一式を2800円で払い下げたので、購入して戦後の生活が始まった。家を失い、死ぬ思いをしてきた戦争はもうこりごりだ。

(編集委員注)

配給制度：戦争遂行のたまに1940年に生活必需品の米、みそ、砂糖、マッチ、酒、ビール、タバコ等10品目は切符がなければ買えない配給制になった。米の

配給で、これまで全国平均サラリーマン平均の1人1日当たり3合(400g)から2合5勺(330g)に削減された。戦後1945年7月にはさらに2合1勺(300g)に削減された。

<http://homepage3.nifty.com/yoshihito/haikyuu.htm>

(編集委員注)

木之本静枝さんは戦後民生委員を43年間引き受けて地域社会に貢献された。勲5等と統計に関する藍綬褒章を受賞されている。1961年国民年金制度の下で1370円の保険料が納められない人の分を立て替えたこともあった。熱心な社会活動家である。

泉崎謙一郎さん証言 (12歳、小学校6年生、千葉市長洲)

私は、当時千葉市長洲町1-44(旧住居表示)に両親と兄弟5人の7人家族であった。私が長男で、母は10月出産予定の身重であった。父は逓信省千葉郵便局に勤務していた。戦争が激しくなって、軍隊の町であり、日立航空機会社が在る千葉市は、空襲の標的になると誰もが思っていた。父は次の用意をしていた。

<我が家の防空壕づくり>

我が家は、父と私と弟の3人で防空壕を庭に2つ造った。うち、一つは布団、蚊帳、衣服、食料など生活必需品を収納する第2防空壕である。当時、蚊帳は大切であった。タンスとか当面、必要としない衣類等は千葉市寺山の郊外の知人宅に疎開させておいた。

一方、人間専用の第1防空壕は、隣家の老夫婦含めた10人用(縦2m×横1.8m×高さ1.5m)を造った。壕が爆風で破壊されないように地上に出る部分を低くした。壕内は、地下から水がしみ出てすぐ溜まってしまい、いつでも壕を使えるようにしておくため、常時点検と排水作業が私とすぐ下の弟と2人の役目であった。

<避難のための事前準備>

何時でもすぐ家を飛び出すことができるように、我が家では、着の身着のまま寝るのが当たり前の毎日であった。非常持ち出し品は、1箇所にとめておき、いざと言う時に直ちに第2防空壕に収納する手筈が整っていた。第2壕への搬入は父の役目であった。

<不安と睡眠不足の毎日>

しかし、準備はしていても不安と睡眠不足の毎日であった。1944年の末頃から1945年になると、夜に定期便のようにB29が飛来して、空襲警報を知らせ

るサイレンが鳴り、そのたびに起こされ、睡眠不足の状態は、7月7日未明の千葉市空襲まで長く続いた。

特に、3月10日の東京大空襲後は、いずれ次は千葉市が空襲でやられることが予想されていた。ラジオから「敵B29〇〇機房総半島沖を北上中」と情報が流れると、まもなく空襲警報を知らせるサイレンが鳴ると、すでにB29は上空にきていることが多かった。ラジオ情報が遅かったのか、それとも飛行機の足が速かったのかわからない。夜に空襲警報が鳴ると、家族全員はただちに起床したが、まだ幼い弟は、ぐずって起こすのに苦労した。

緊張の中、各自避難準備をし、父の指示を待った。しかし、いつ空襲に遭うのか、という不安と緊張は、7月7日未明の千葉空襲までの長い間続いた。この頃になると父は、空襲警報が発令されるたびに「今日は千葉がやられるんじゃないか」と、いつも言っていた。家族は、いつ空襲されても覚悟はできていたが、家族の無事を願っていた。

<父の避難指示>

7月6日夜半、母子6人と隣家老夫婦の8人な壕内に身を潜め非難していたが、父は、壕の外で周囲への爆撃と火災の状況を監視していた。「もう危ないから逃げろ、謙一（郎）皆を頼んだぞ」と叫んだ。我々母子6人と隣家の老夫婦の8人直ちに安全地域への避難行動を開始した。自宅の防空壕では火災には耐えられないと父が判断した。壕を囲む三方（北西東）に隣接した家が焼失したことを考えると、父の判断は正しかった。一方、父は生活必需品を第2防空壕に収納した上で、家族より一足遅れて避難行動を開始した。家財を第2壕に搬入に当たって、焼けてしまうんだと思うと、予定外の物を壕に搬入した。

<安全地域へ避難行動>

7月6日夜半から7月7日になって、父の逃げろとの指示に従って壕外に出たところ、250mほど先の県庁敷地内の武徳殿や裁判所あたりの北方の空は火災で真っ赤に染まり、しかも、まもなく焼夷弾攻撃が長洲町にも迫ってこようかというなかにあつて、焼夷弾が落下中に出す音はカラカラカラカラ... ちょうど5月節句の鯉幟の風車が風で回るときに起きる音が空のあちこちから不気味な音として耳に聞こえた。加えてB29が100機以上かと思われるエンジン音が気でも狂ったように鳴り響き、市内はまるで戦場のような情景であった。

このような中での避難にもかかわらず、身の危険を肌で感じはしたが、不思議なことに怖さを感じることはなかった。いや怖さを感じる余裕がなかったのかも知れない。只、必死になって母弟妹を安全なところに連れて逃げることに念頭になかった。

<たどりついた避難先>

父の脱出指示で表の道路に出たところ、既に避難する人達で道はいっぱい、

ほとんど身ひとつの人達の流れは、亥鼻町、葛城町の高台に向かっていった。私たちは、避難する人達の波に押されるままに進んでいき、着いた所が千葉市立女学校（現在は、葛城中学校）の木造校舎で、すでに大勢の人が避難していた。人々は誰も無口でじっと耐えていた。身内や家の安全を心配していたのであろう。夜半に雨が降り出したが、屋根のある所に避難できたから濡れずにいることを感謝した。母は、家が焼かれないうと、また別行動になった父が無事であるようにと祈りつづけていた。

一方、父（父の証言）は生活必需品を第2壕内に収納の際、焼夷弾により自宅周辺から火の手があがり、隣家の消火に当たったが焼夷弾による火勢が強く、さらには、自身が焼夷弾の直撃に遭う恐れがでるなど身に危険が迫ってきたので、現在の本千葉駅と蘇我駅間の線路方向を目指して避難開始した。本千葉駅と蘇我駅間に1台の機関車が避難のためか、逃げてきて停車していたので、その機関車の陰に避難していた。この辺りはまだ水田地域であったので、父も機関車も空襲と火災の恐れが少ない安全な地域だと思ったのである。

<焼失した隣家のお釜に仕込んだご飯>

7月7日の夜が明けて、疲労と空腹が押し寄せてきた。隣家が前夜仕込んであったお釜のご飯が、空襲で焼失した際の熱によって、半炊けでかなり硬めではあったが何とか食べられるほどであった。さつまいも（じゃが芋？）が多く入った炊き込みご飯だった。その半炊けご飯と、我が家で用意したご飯とで、隣家族と一緒に朝食を摂った。炊き込みご飯はとても美味しかった。

<本町小学校地下道事件>

7月7日未明の空襲による火災で学校が焼失し、表道路から校舎の地下を通過して運動場に通じる地下道内に避難された多くの方の尊い命が失われた。10～20名の黒こげの焼死体が地下道の中央あたりに折り重なっている状態を目撃した。まるで庇いあっているかのように見えた。心からご冥福をお祈り申し上げます。

<間借りしての授業再開>

1945年7月7日未明に空襲による火災で本町小学校が焼失した。

授業が再開されたのは、9月の2学期からだったと思う。私たち6年生は、男子師範付属小学校の音楽室を間借りしての授業であった。学区内は、空襲で多くの家屋が焼失したため、6年生300人近くいた在校生が散り散りになり、授業再開時には60名位しか集まらなかったと記憶する。その後、しばらくして本町小は、現在の末広中学校に移転した。

当時、私たちは、贅沢は敵だ、欲しがりません、勝つまでは、一億一心火の玉だ、撃ちてしやまむ、鬼畜米英、神風、などと教えられた。また、母校（本町小）出身の海兵、陸士、予科練(注)などに入られた若き先輩達が来校され、在

校生全員を前にして士気を鼓舞するような話をされた。いつかはお国にご奉公したいと思う生徒は多かった。今思えば教育は恐ろしい。戦争は絶対繰り返してはならない。

(編集委員注)

海兵

海軍兵学校教育綱領には「将来海軍兵科将校として軍務を遂行するに必要な基礎を確立する」とされた。海兵生徒の修業年月は3年から4年が標準であったが、昭和16年以降は2年4ヶ月に短縮された。健康で普通に勤務すれば、大佐までは進級できることが内規とされていた。現在でも『江田島』とは海兵の代名詞ともなっている。(Wikipedia)

陸士

陸軍士官学校とは大日本帝国陸軍において、兵科将校を養成する機関をいう海軍は徹底的な学力主義で、全員の席次が明らかになっていたが、陸軍士官学校では成績は非公表であった。士官学校の成績よりも、陸軍大学校に合格するか否かが、陸軍将校の一生を左右する重大問題であった。(Wikipedia)

予科練

旧日本海軍における航空機搭乗員の養成制度。海軍飛行予科練習生の略称。航空兵力の拡充のため1930年(昭和5)に創設。その後、中学校第4学年第1学期終了程度の者から採用する甲種、高等小学校卒業程度の者から採用する乙種、海軍兵から採用する丙種の3種に区分され、海軍飛行兵の中心的存在となった。練習航空隊としては茨城県土浦(つちうら)の霞ヶ浦(かすみがうら)航空隊が有名であり、その名は予科練の代名詞となった。(Yahoo百科事典)

吉田昭三さん証言(17歳、中学校3年生、千葉市長洲)

1. 1945年7月7日B29の攻撃を受けたときの家族の状況

私は、7月7日の千葉空襲の当日、両親と姉の4人で千葉市長洲1丁目39番地に住んでいた。父は53歳、1923年4月から1940年まで県立千葉中学(現在の千葉県立千葉高等学校)に教師として勤務し、1941年から1945年の間、東京都本郷中学に教師として勤務。母は54歳で無職、姉は25歳で検見川小学校で教師として勤務していた。

私は17歳で県立千葉中学が当時の戦争の非常事態に対処するため、5年制の中学を4年の卒業制度に変更された最初の年にあたり、4年で卒業した珍しい学年であった。

私の兄、清は県立千葉中学5年から陸軍士官学校へ入り、1944年5月に戦死、

次の兄は県立千葉中学4年から海軍兵学校へ入り、1943年1月に戦死した。

私は兄2人に続いて航空士官学校の入学試験を1945年5月10日に東京の調布で受け、合格通知を受け、自宅で入校の待機中の身であった。

このことが後述するように我が家が焼夷弾による火災を受けたときも2人の兄の戦死で悲しみのどん底にあった母と姉の身体を守ることが出来たことにつながったように思う。

2. 千葉市内の空襲に備える準備体制

1945年に入り、戦局は厳しいものとなってきたため、千葉市内では住民の防火訓練を地域ごとに頻繁に行うようになっていた。

また、各家庭では防火用水を桶などに備蓄すること、竹竿の先に荒縄を束ねた「火はたき縄棒」を備えることなどが千葉市から指導されていた。

庭のある家では、衣類、家具、食料などを火災から守るための地下壕の設営も市から指導されていた、

我が家では、庭の中央にあった庭木を伐採し、縦1.5m、横0.5m、深さ0.7mの荷物類専用の地下壕（人の入れない壕）をスコップで掘り設営した。しかし、長洲は地盤が低いいため、大雨が降ると水が溜まり、水を汲み取ることもしばしばあった。

各家では「灯火管制」という言葉のもと、日頃から窓は黒いカーテンでカバーできるようにし、電気の光源部分には、黒い布をかぶせるなど、夜間の灯りが外に漏れないようにするよう準備させられていた。

防火用服装の着用を千葉市から指導されていた。手づくりで作製し、常備していた「防火用の綿入り頭巾」もその一つであった。また、男性は革靴にズボンとゲートル着用。女性はモンペ（木綿で作製した足先がしまるズボン）を着用していた。

また、千葉市の指導の下、飛行機襲来を想定して、「消火訓練」「灯火管制」時の訓練等を行っていた。

3 空襲警報発令される。

1945年7月6日午後11時ごろ（記憶不確実）、ラジオから空襲警報発令の放送を聴き、全身に緊張感があふれる。

母と姉は、前記の灯火管制時の対処方法に従い、窓を黒いカーテンでカバー、電灯の笠には黒い布をかぶせ、自分の身を守るための「防火用綿入り頭巾」を頭にかぶり室内で待機。

私は、家の庭に作られている家具類専用の地下壕へ貴重品を入れた茶櫃（びつ）と布団カバーに包まれた布団類を入れ、急いで土をかぶせる。（後日、聞いた話では、地下壕に品物を入れたあと、土をかぶせなかった場合、焼失したものが多かったと聞く。）

父は身支度をして、我が家から徒歩約 10 分の距離にあった元勤務先の千葉県立千葉中学へ走る。(当時の常識は個人の家を守ることよりは、公的な建物を守ることが優先されるものであったと思われる。)

4 B29 千葉上空を飛行、焼夷弾わが家に落下

1945 年 7 月 7 日午前 1 時ごろ (記憶不確実) B29 の米軍爆撃機多数が南方から飛来、私の目撃では、寒川港方向から東方向へ、約 10 機ずつの編隊を組んで次々と千葉市上空を通過していった。

探照灯で照らされた B29 が次々と編隊を組んで飛行する残像が未だに私の目に焼きついて残っている。

まもなく、焼夷弾投下が始まり、千葉市内の各所から火の手が上がる。

私は、千葉市の上空が赤くなってきた色を見て危険を感じ、母 (54 歳) と姉 (25 歳) には柏戸病院と房総線の間にある田んぼ地域へ退避してほしいとお願いし、我が家から離れてもらった。

私、昭三 (17 歳) は「防空頭巾」をかぶり「バケツ」と「火はたき縄棒」をにぎり、空を見上げる。

B29 の編隊は次々と上空を通過、午前 1-2 時ごろ (記憶不確実) 我が家に焼夷弾 3 個落下 (1 個は風呂場の天井、2 個は後で庭に落下していたものを確認)。そのうちの 1 個は風呂場の天井にとまった様子、火がメラメラと天井板の隙間から下へのぞく。竿の先端に縄を取り付けた「火はたき縄棒」を水桶の水につけたのち、天井を下から突き上げた。焼夷弾は下に落下してきたので、外の庭方向へ「火はたき縄棒」でころがし出し、消し止める。

そこで我に返り、周囲を見ると両隣の家から火の手が上がっている。私は「我が家の火は消火しました。」と大声を上げて周囲に伝えたが、両隣の方は非難たらしく、何の応答もない。(我が家に落ちた焼夷弾と同じ時刻に両隣の家にも落ち、火の手が上がっていたものと思う)。

5 ラジオを持って避難、母と姉のもとへ

両隣の家火災発生状況を見て、自宅から離れることを決断。自転車を出して脱出することにした。脱出路は道幅約 1.5m の狭い道、火はすでに板塀越しにのびている状況にあった。

避難途中でラジオのないことに気になり、再び、家へ引き返す。(後日、このラジオの存在は家族、周囲の人から 17 歳の人行動とは考えられないと、半分褒められ、半分しかられたことを思い出す)。家に戻った私はラジオと日用品の格納された小型トランクを自転車の荷台につみ、幅 1.5m の狭い道を通り抜ける。(後で分かったことだが、このときに被っていた防空頭巾には、火のこげ後が見られた。)

無我夢中で狭い道幅の道路を自転車で走り抜け、現在の大網街道に出て、母

と姉にお願いした退避予定地点の柏戸病院と房総線の間、田んぼへ向かう。

大勢の人々があちこちにたたずんでいる姿が暗がりの中に点々と見えるが母と姉の姿はすぐに確認できない。

7日朝4時過ぎと思う。東の空から明るくなり、人々の顔が見えるようになる。

防火頭巾姿の母と姉の姿を漸く見つけ、走りよった。そのときは、手を握り合い、感激で涙が止まらなかった。母、姉、私の3人は心細い思いをしながら、父のことも心配し、しばらく房総線と田んぼの間でやすむ。

6 我が家は灰となる

午前7時ごろと思うが、千葉市方面の煙が次第に収まり、母、姉、私の3人、寄り添って長洲2丁目を経由して長洲1丁目の自宅方面へ向かう。長洲2丁目付近では、焼けた家がないのでやや、安心して歩いた。

長洲1丁目の自宅付近へ来て呆然、焼け跡から煙が立ち上っているだけであった。長洲1丁目付近が焼夷弾を受けて消失した家と焼夷弾を受けずに焼けなかった家の境界線地域のものであった。

父も間もなく帰り、千葉中学は無事であったと語っていたが、父、母、姉、私の4人はしばらく立ち尽くして、何をなすべきか考えた。

焼けた後を見たときの思いは今になっても悲しく、家と家財と思い出のすべてが焼き尽くされてしまった。

しかし、私の思い出は、約17年間のものであるが、父と母と姉は京都から千葉市へ引っ越してきた1923年以来からの26年間であることを思うと、その悲しみはいかばかりであったかと思う。

7 自宅焼失後の生活

7月7日の空襲で自宅を失ってしまったが、その日から生活をどこかでしなくてはならない。千葉県内に親戚のない我が家族は途方にくれた。思案した結果、姉が勤務している検見川小学校の小使室（現在は用務員室と呼ばれている）の借用を依頼し、父、母、姉、私の4人は、7月7日の夜を寝させてもらうことにした。

検見川小学校の近くの家からリヤカーを借用し、東京湾沿いにあった道路を姉と私と二人で交替しながらリヤカーを引き、ひたすら歩き、長洲の我が家の焼け跡にたどり着く。

7月6日の空襲直前に防空壕へ入れた布団類、衣類、日用品を防空壕から取り出した。土を被せてあったことが成功し、焼けずに全部残っていたのは幸いであった。

最低、必要なものをリヤカーに積み、再び、検見川まで姉と私の二人で登戸経由検見川までの海岸通りをひたすら歩く。17歳になったばかりの男の子であったが、歩きながら涙が出てきてしまった。涙の出た話とは今日、この「7月

7日の思い出」を書くまで、一緒に歩いた姉にも言わず、勿論、両親にも隠していたこと。この「7月7日の思い出」を書きながらすべて蘇ってきたことです。

無事に検見川小学校へたどり着き、リヤカーから荷物を下ろし、父、母、姉、私の4人の休む場所が確保できたところで疲れがどっと出たことを思い出す。

父、母は電車で間もなく検見川小学校に到着、無事を喜び合った。近くの銭湯へ行き、煤だらけの全身を洗い、僅かな寝具を6畳部屋に敷き、父、母、姉、私の4人は眠りに付く。一生忘れられない長い7月7日は終わった。

この後、一週間ほど、検見川小学校の一室に4人が仮住まいさせてもらっていた。その後、長洲2丁目の千葉県立千葉中学同窓の友人から、二部屋をお使い下さいと声をかけられ、救われた気持ちで移動し、一応、通常の生活に戻った。

その1か月後の8月15日に終戦の言葉をラジオから聞き、私は廊下に直立して聞いたことを思い出す。そのときに聞いたラジオ放送の「ラジオ」が7月7日の火災の中、危険を冒して家に戻り、持ち出したラジオであったのも思い出を一層深めてくれたことである。

8 今になって思うこと。

昭和20(1945)年7月7日の七夕空襲の出来事は、戦災にあったものとして、悲しい出来事であった。千葉市内に住み、この戦災にあった人々は、お互いにこのことを語ろうとしないでいた。その思いは、友人をなくし、同時に生死を目の前にして生き残ってきた人々の悲しく、また、思い出したくないという気持ちの表れであったと思う。

今回の七夕空襲の経験者として話題提供にご依頼があったときは、戸惑いもあった。しかし、今まで閉ざしていた自分の青春時代の貧しく、かつ、苦しかった時代を生き抜いてきたことに誇り持ち、語り継ぐべきものと思うようになった。

また、生死を左右する中で17歳になったばかりの私が、母と姉を思い、一人自宅に残って家を守ろう、千葉市を守ろうとした行動を今になって褒めてやりたいと思うし、現代の青少年にも語りついでおきたいと思う。(1945年(昭和20年)7月7日の思い出)

戸田鎮雄さん証言 (15歳、航空工業学校4年生、千葉市院内町、元千葉県議会議員)

千葉空襲のあった7月7日、私は千葉神社の近くの院内町に住んでいた。千葉商業学校が2年生のとき、千葉航空工業学校と変更され、寒川の埋立地に建

設されていた「日立航空機工場」に学徒勤労働員で狩り出されていた。6月10日の空襲で千葉市が爆弾攻撃（これについても書いてください）され、アメリカの艦載機 P51 によって工場は頻りに機銃掃射を受け、犠牲者の出たことを今でも忘れません。7月7日の夜、空襲警報のサイレンの音やラジオの敵機襲来のニュースを聞き、今夜は「大変だぞ！」といった予感が働き、千葉神社の境内に避難して様子を見ていると、神社の近くの民家が勢いよく燃え始めた。家族や境内に集まっていた人たちに「これはやばい！」と声をかけ、近くの田んぼまで急いで逃げた。火の勢いが強く、衣服に火がつくのを防ぐために多くの人が小川に飛び込み下半身を水につかって(頭から水をかぶらないのか、絵になるか)、火事のおさまるのを長い時間、じっとして待っていた。焼夷弾の落下する様子を悲しい思いで眺めているうちに「花火のように美しい」と感じた。

翌朝、家に戻ると隣近所は丸焼けであった。(詳しく情景描写、自分の家はどうなったのか) これからどこで寝るのかが、不安で胸がつぶれる思いであった。市内に流れる葭川に、騎兵隊の軍馬も・・人間と同じように焼け死んでいた

網岡壽江さん証言（当時3歳、旧千葉郡生浜町塩田、満徳寺）

私は満徳寺の長女として、旧千葉郡生浜町（現千葉市中央区塩田）で生活していた。当時の家族構成は父母、祖母、私と妹の5人であった。3歳になって千葉市に空襲が予想されたので、住職の父は妻、私と妹を縁故疎開させることにした。千葉の寺にも防空壕は作ってあった。壕の入り口は木戸がはめられ、その上には土が盛られていた。中に入ると3畳分の広さがあり、奥が深い形で、板の上に筵（むしろ）が敷いてあった。そこに、玉虫色の大きい布団があった。夜間用に蠟燭があった。私は防空壕が狭くて好きになれなかった。母の話では、空襲警報になるとサイレンが鳴り、家族が防空壕に入るのだが、頻りに警報が発令されるが、私は空襲でも泣かずに、寝巻きを着替え、防空頭巾をかぶり1人で防空壕に退避していたらしい。私は、小さい妹がいるので、親に迷惑をかけないで行動した健気な少女だったらしい。しかし、明治21年生まれの祖母は気丈な女性であったので、終戦近くなつた頃は「敵機が来ても、私はいちいち防空壕に入らない、馬鹿馬鹿しい。」と言っていたらしい。だから祖母は疎開もしなかった。連日の空襲で、夜は電灯に風呂敷のような布で光を外に漏らすな（灯火管制）と言う命令が出ていた。私の疎開中に満徳寺は機銃掃射や焼夷弾による空襲を受けていた。何時のことか知らないが、寺の南面雨戸の戸袋に1発の機銃が命中したので、13枚の雨戸の同じ位置に機銃痕が戦後長く残っていた。また、本堂屋根に焼夷弾が投下されたようで、屋根から日が噴いた。消防

団が来てポンプで水をかけて鎮火させた。しかし、消火水のおかげで本堂の畳は水害を受けたので、毎日畳が干してあったことを記憶している。

疎開前の私の空襲体験は、祖母が病気の私を乳母車に乗せて市原の八幡宿の大河内病院に連れて行く途中、空襲警報になり、艦載機の攻撃を受けた。祖母は、とっさに私を乳母車から道路に引きずり出し、私の上に被さって、私を庇ってくれた。その時は、幸いにも二人は無事だった。空襲警報が解除されてから、前の家の人「家に入りなさい」と優しく声をかけてくれたので、中で休ませていただいた。祖母は小さいとき、奉公にあがって鍛えられていたので、しっかりしていた。

よく背景がわからないが、数十頭の裸馬が千葉市の方向に走っている姿を覚えている。

疎開先は、祖母の知り合いの岐阜県郡上の家であった。終戦までの9ヶ月間位、そこで母子は暮らした。疎開先では空襲はなかった。父がときどき疎開先にやって来た。父は寺の境内に植えられた桃の実（スイトウ）を持ってきてくれた。岐阜県郡上地方も食糧が不足していた。私が父の土産の桃を食べて、大きな種を捨てると、それを拾って食べる子どもがいた。疎開先では私もいつも空腹を抱えていたから、長良川の支流上流に桑の木が実をたわわにつけているが、枝は川側に張り出していたので、とても悔しかったことを覚えている。妹も空腹であったから「お姉ちゃん、これ食べられる？」と道端の雑草を指差して私に訊ねた。

終戦になって、父が家族を迎えに来た。千葉駅で降りたが、千葉空襲の焼け跡は覚えがない。しかし、家について母が作ってくれたアサリ入りカレーライスの味は忘れられない。母が、家族揃って戦争が終わった開放感をこの食事に表現したのだろう。

私が小学校に上がる頃、母は私に「憲法が変わるのよ、これから男女平等になる。女も選挙する権利が認められる。だから、これからは女も勉強しなければいけない」と教えた。母は婦人会活動に参加し、生浜町塩田で役員を務めた。母は読書家でもあったので、社会の変化を感じながら、世の中の動きに敏感に対応していた。

父は、妻子の命を守るために、疎開をさせたが、父の信条は「人間は全て平等である」を貫いていた。檀家の中に部落民がいて、たびたび、父に犬の肉をご馳走した。父はそれをありがたくいただいていた。私は父を人間として立派だと思った。

私はこんな父母の影響で、本と文房具が与えられ読書と絵が好きになった。当時読む本がないので、授業の始まる前に国語の教科書を読んでいた。小学校3年生でビクトルユーゴ作の「ああ無情」を、6年生で小林多喜二作の「蟹工船」

を読んでいた。戦争直後の生浜小学校は 2 部制授業であった。中学校が焼けたと思われる。戦後も食べるものが不足していた。砂糖がなく、代用品のグリコースであったが、当時甘いものを口にすると幸せな感じになった。私の家の教育環境は恵まれており、雪や雨の日、私はゴム長靴を履かせてもらったが、素足にわらで編んだ草履（ぞうり）の子どもも居た。女の子はモンペを履いていたが私は、母がミシンで裁縫したズボンを履いていた。学校で支給されるクレヨンは 8 色で、しかも品質が悪かった。私は父が買ってくれた 12 色、24 色のクレヨンを学校に持って行ったので、絵の時間は友だちが私のクレヨンを借りに来ていた。画用紙は学校のプリントの裏側を利用したものであった。私は、子ども心ながら、貧富の差が生じる社会に疑問を持つようになった。

私は、人間が人間を殺す戦争を許せない。若い人には、戦争がどんなものであるかを知って欲しい。私も語りたい。

（証言者追記）

もう 2 年ほど前、小学校のときの恩師が岐阜の郡上に住んでいることが分かりメールで 3 歳の頃疎開をしていたと連絡した。先生は疎開先の住所も分からないのに名前だけで私の疎開していた家を、知人を介して調べて連絡してくださった。其れから何度かのメールのやりとりの中で一度尋ねてみたいと思うようになってきた。そんな経過で 2009 年 8 月 29 日に先生を訪ね、私の思い出の地に足を運ぶことが出来た。記憶の通り長良川の支流の桑の実が垂れ下がっていた川は今も現存し美しい川の水は音を立てて流れていた。ひもじくってどんなにかその桑の実が欲しかったことか、よちよち歩きの妹が「姉ちゃんこれ食べれる？」と草をとっていったことも記憶に鮮明だ。確かに近くの駅から歩いたら、悠に 1 時間はかかるという山道を 3 歳の私は、歩かなければならなかったことも、戦時下の子供は強かったと思う。私の疎開していた藁葺き（わらぶき）の家はもう壊されてなかったし、住人も代が変わって会うことが出来なかった。あの時と同じ雲の流れる平澤家の集落に訪れたことは、私の人生の中の貴重な思い出となった。

（編集委員注）満徳寺の本堂で授業

千葉市蘇我の柴田春光さんの証言によると、転校してきた千葉郡生浜国民学校は、蘇我地先の埋め立て地域に立地する日立航空機軍需工場への空襲被害を最小限にする為に航空機部品を生浜国民学校の全ての教室に保管したので、学校で授業はできなくなり、近くの塩田神社と満徳寺を借りて授業が続けられたとある。このことを満徳寺の長女であった証言者の網岡壽江さんに知らせたところ、「子どもたちが満徳寺の庫裏の一部と本堂を使用していたことを覚えている。それが授業だとは知らなかった。母君が子どもの使用した後、障子を手入れしていた。障子を閉めていたので 1944 年の秋から 1945 年の春頃である。夏

は障子をはずして竹で作られたふすまのようなものを夏障子として使っていた」との回答を得た。二人の証言は符合している。

松本郁子さん証言（7歳、小学生1年生、千葉市）

千葉の街が、B29の爆撃を受け焼野原になったあの夜、私は小学校の一年生だった。当時、私の家は旧国鉄千葉駅（現在は市民会館）から五分程の所にあった。にもかかわらず前の路地を少し入れば、田んぼが遠くの山の下まで広がっていた。今は埋め立てられマンションや住宅、大型店舗がぎっしりと建ち、どこにもその面影はないが、その田んぼのお陰で私は命拾いをした。

空襲警報は毎日のように発令されていた。1945年7月6日の夜、父は「今日は危ないかもしれないから、広い所へ避難した方が良い」と言い、祖母、叔母、母、私の四人は田んぼへ避難することにした。家路を抜け田んぼの前の広い土手道に出た時、パッとあたりが明るくなり最初の焼夷弾が落ちた。それから空が白むまでの間、どの位の焼夷弾が落とされたのだろうか。

母と土手を滑り降りた時には、祖母達とは離れ母と二人になっていた。母は私の手を握り小さな流れに沿って田んぼの中心に向かったようだ。飛行機の轟音が近づくと、母は水の中へ私を押し込んだ。見上げると真っ黒な塊が不気味な音をたてて落ちて来る。幸いまわりは田んぼ、焼夷弾は炸裂することなく泥の中に吸い込まれた。家の方はすでに沢山の火の手があがり、周りがうっすらと見える程明るかった。畔道には飛んで来た火が、ちろちろ燃えていた。私が入学したばかりの院内小学校が窓から火を噴いて崩れ落ちて行くのが見えた。田の中の一寸した原に出た時、子供を負ぶった人が、母に、「背中の子は生きていますか。」と聞いていた。

一晩中水の中につかり、B29が去り、空が明るくなって来た頃、私達は土手に戻った。母は「家の様子を見て来るので、ここを動かないように」と私を土手に残して離れた。その日の私は、母が自分の着物をほどいて、私の七歳のお祝いにと縫ってくれた、もんぺと上着だった。その着物も泥まみれになり、逃げる時履いていた新しい下駄も何時の間にかなくし、裸足（はだし）だった。土手の下の原っぱには全身火傷を負った馬がじっと立っていたのが目に焼きついている。

我が家は勿論、街はすっかり焼け野原、ずっと遠くの方まで見わたせた。幸い、私の一家は、最初は消火を試みたものの断念して避難した父も祖父も含め、無事に焼け跡に帰って来た。防空壕の中の物は、すっかり蒸し焼き状態で使い物にはならなかった。大人達の話では、町の中の水のある所で多くの人が焼け

死んだと言う。

近くで奇跡的に焼け残った家で、おにぎりを貰い、運よく焼け残った親戚の家へひとまず身を寄せた。途中、水道管があちこちで破裂、きれいな水が噴き出し、すっかり焼けて真っ黒になった人間らしい塊も見た。七歳だった私には、当時の厳しい生活等はあまり記憶に無いが、あの夜の恐ろしさや、光景は未だに忘れない。

後で記録を見ると、あの夜の攻撃は、B29 百機で、七日午前零時頃より午前三時半ごろまでの長時間に渡ったそうだ。

志位茂野さん証言（17 歳、千葉師範学校 2 年生、寮生、千葉市）

当時、私の家族は両親、私と姉妹 5 人の 7 人家族である。父は、陸軍下志津飛行学校に勤めていた。父は、あまり仕事のことは家族に話さなかった。

私は 1939 年 4 月、千葉師範学校附属小学校の高等科に入学した。当時は軍国主義一色の時代で、私たちは、毎朝「天皇陛下万歳」と墨書きして担任に提出させられた。私は、毎朝書けないから、まとめて 10 枚ぐらい書きためて、毎朝 1 枚ずつ持っていくと、担任が廊下の壁に全員文張り出して、みんなで眺めていた。

又、入学当時から 1 人の男性教師が校門脇の奉安殿（ご真影がまつてある）の前の地面に正座して最敬礼していた。雨の日も濡れながら。友達はびっくりして眺めたものである。この先生が、戦後どうしたか知らない。

又、当時、朝礼の時、教頭先生が「今、日本人として最も大切なものは何か」の質問に 1 人の生徒が「それは、大和魂です」と答えたら、教頭は満足そうに、その生徒を褒め称えた。そのようなことが、奇妙に思い出され、当時の驚くべき教育の実態に今更ながら唾然とする。子供の頃、重慶爆撃とか、中国での作戦が成功すると提灯（ちょうちん）行列が行われた。

私は、1941 年 4 月、千葉師範学校女子部に入学した。私達が入学した時から学校は、全寮制になり、千葉在住の学生も寮生活となった。私たちには月 25 円が支給された。勉強を受けながらどうして 25 円も支給されるのか、誰に聞いてもわからなかった。この疑問は後になってわかった。つまり、学校は官費の学校で、国の方針に従って設立されていたからである。私と同じ師範学校の 5 年生にいた姉は 1 円 20 銭支給され、当時文庫本が 20 銭だから、6 冊買えると喜んだそうだ。

入学したその年(1941 年)の 12 月 8 日は、帝国海軍が真珠湾を攻撃した日である。学校では、生徒が食堂に集合させられ、大本営発表の内容が伝えられた。

そして軍艦マーチの曲が大きな音で流され、只ならぬ雰囲気みんな興奮して、私たちは「勝った、勝った」と大喜びをしていた。学校当局は、このように生徒を戦争に駆り立て、鼓舞していた。中国戦線で日本軍は泥沼状態にあったから、景気のいい対英米戦での初期勝利を国民は喜んでいて。

また、戦時下で女子といえども体を鍛えるためか、全校生徒で宮城までの行進が実行された。寒い寒い冬の日だったが、夜中に起きて、真っ暗い中、学校を出発した。私は、その時歩きながら眠ることを覚えた。市川あたりでだんだん明るくなってきたが、雨が降り出した。そのうち、雪が混じるようになり、小松川橋を渡る頃には吹雪の状態になり、橋の下から吹き上げるその寒さに身も凍る思い。運動靴はびしょぬれ。そのうち靴の先が凍ってきて、歩くと足先が氷でガチャガチャ音のする有様であった。途中、近くの学校をお借りして冷たくなったお弁当を震えながら食べた。それでも何とか宮城まで歩いて頑張り通したが、宮城に着いた時、誰も口を開く人もなく、黙り込んでいた情景を思い出す。その夜、5年生に在学中の私の姉は四街道の家に帰って「ワーワー」と泣いたと言う。母が「妹が寄宿舎で頑張っていると言うのに、何と弱虫な」とひどく叱られたと言う。

また、学校では午前中は、授業があったが、私は勉強にあまり身が入らなかった。英語の時間は敵性語だということで、みんな熱心に勉強しないで、英語の先生にシャーロックホームのお話をせがんだ。英語の成績はみんながた落ちであった。後に夫になる志位は当時陸軍幼年学校に在籍していたが、英語は敵性語どころかばっちり教え込まれたと言う。3年間と言う学習で英語力が余るので驚いた。また、学校は、食糧増産のために、千葉市高品にある師範学校の畠に行く毎日であった。作業着に鍬を担いで開墾、サツマイモの苗植え、草取り、収穫と真っ黒になって働いた。農業を教えてくれた男の先生は、大根を引き抜き、手で土を払うと、「この大根はうまいぞ」と言いながら豪快にかじった。この先生も、空襲で亡くなった。この先生は新婚であったから、残された奥様はどんなに悲しかったことか。

1944年、戦争がいよいよ激しくなり、日立航空機の工場から工作機械が体育館に運び込まれ、学校工場に生徒は3組（昼組、夜組、深夜組）に編成され、24時間通しての作業が始まった。当時、私は女子師範の本科2年、来年は卒業という時期を控えていたが、教師になる夢などまるでなく、ただ学校工場で航空機のプロペラ部品を作るため、「大君の辺にこそ死なぬ、かえりみはせじ」を歌いながら旋盤、フライス盤を手で回していた。明けても暮れても日の丸と「神風」の文字を染め抜いたはち巻きをしめ、日毎に激しさを増す空襲警報に夜も着たままの状態でもぐり込んだ。

1945年6月10日、日曜日の朝、私は8時から16時までの昼勤務のため、夜

勤務だった M さんと笑顔で「ごくろさま」、「お願いね」と挨拶を交わしながら交代した。M さんたちは疲れと空腹のためすぐ食堂へ、私は、工場がある体育館に向かったその直後だった。「空襲警報！退避せよ」の合図。またかと思いながら、でも何かしら不気味な予感が走り、外を見ると低空の米軍機がこちらに向かって来た。急いで防空壕へ入ろうとした時、「ゴーッ、グーン、グーン」という超低空飛行で頭上に迫る恐ろしい爆音。壕に飛び込むと同時に、爆風が私の右腰と背中をたたきつけた。「もうだめ！」「今日は、いよいよ死ぬときが来た」と覚悟した。私たちは、手を握り合い、体を抱き合って地べたに伏した。「ズズーン、ズズーン」絶え間なく地面にぶち込まれ、炸裂する爆弾で私たちの体は上下に押しつぶされ、地面は生き物のようにのたうち、世界の終わりのような思いで息を殺していた。私たちは、気絶はしなかった。

しばらくして、あたりが静かになった気配で、我に返り、外に出ようとしたが、出口がない。壕はつぶされ、私たちは生き埋めになっていたのだ。私たち数人は、夢中でモグラのように、熊手のように土を掻き分け、やっと外へ出ることができた。

なんということだろうか！聳え立つ校舎（全て木造）も体育館もすべて跡形なく吹き飛んで、遠くまでも見通せる別世界になっていた。足下には、粉みじんになった木切れ（およそ 10cm 大）と瓦礫の山ばかり、また、校地のあちこちには、爆弾でえぐられた直径 10m 位の穴ができた。穴を呆然と眺めていると、底から水が湧き出して、その上に油膜が覆った。木切れの山からは火の手がチロチロと燃え上がり始めていた。私たちは、変わり果てた母校の姿にただ、呆然と立っていた。この空襲で母校千葉女子師範学校が一瞬の中にがれきの山と化し、恩師 1 人と 8 人の友を失った。

空襲で怪我を負った生徒も大変だった。同級生の 1 人は足に爆弾の破片を受け長い間、銚子の病院にいた。二人は、怪我が理由で、教師になることができなかった友達もいた。

1945 年 8 月 15 日、空襲で学校が全壊したので私は、四街道の実家に帰っていた。それでも空襲警報にさらされ怯えて暮らしていたが。父がラジオを下に下ろして、近所の人たちが周りを囲んだ。父に、何があるのかを聞いたが、父は「黙って聞け、今から天皇の放送がある」と言った。「オウオウ」と変な抑揚の天皇の声が雑音とともに聞こえたが、意味がわからなかった。父は「戦争は終わった」とつぶやいた。私は「戦争がおわったの？嬉しい。それはよかった」と声を上げた。自由になれる、夜間、電灯に黒い布を被せなくてもいい。この上なく嬉しかった。

戦後、四街道の兵舎を利用して学校は再開されたが、学校や教師は軍国主義教育について反省のできる状態ではなく、民主主義と言う言葉を聞いても何の

ことかわからなかった。「民主主義ってなあに？」友だちともよく語ったが、よくわからない。私は民主主義もわからずに、船橋市立塚田小学校に赴任した。私は、しばらくは民主主義を語ることができず、教科書とおりの授業をしていた。

父は、戦後、職を失い、陸軍飛行場跡の1町5反歩の払い下げを受け農業を始めた。これはこの土地を開墾して食糧増産を高めることが目的である。だから開墾は至上命令である。芝で固まった飛行場の跡地の開墾は慣れない父には大変であった。父は、その土地の真ん中に小さい家を建てて泊り込みでがんばった。母もまっくろになって開墾した。私たちも休みの日は手伝った。一鍬入れても土が掘り起こせないような土を、ひとくわ、ひとくわ掘り起こし、芝についている土を払い落とす。すると顔には土がバラバラ降りかかる。その芝を乾燥させて燃やして肥料にした。何年もかかって、やっと農園ができ、おいしい西瓜が取れた時、父は「俺の作った大和農園だ」と言って嬉しそうだった。しかし、5人の子どもたちは後を継ぐ人がいなく、父はこの畠を45万円で売ってしまった。父は疲れ果て77歳で亡くなった。

志位はその当時、四街道に住んでおられた岡倉天心の孫に当たる岡倉古志郎さんが主宰する北総文化研究会活動に参加して、いち早く軍国主義を脱出し、民主主義運動に入った。

64年前、ついさっき、笑顔で別れたMさんはじめ9人の師や友が恐ろしい爆弾の犠牲になり、帰らぬ人となった。戦争のむごさ、むなしさ、怒りが、今も生々しく蘇ってくる。同窓会で私たちは、「こんなに長生きしているのは、犠牲になった友だちが私たちを守ってくれているのよ」と話している。戦争の思い出は風化しつつあるが、友の死が無駄にならぬよう、2度と繰り返すことがないようにと願わずにはいられない。絶対戦争をしないと憲法9条に明記されているのに、「侵略戦争ではなかった」と言う元航空幕僚長が現れ怖い。今度、世界大戦になったら地球は全滅する。

若い人はエネルギーがあるが、それが正しい方向に向くようにしたい。平和を守るには、1人1人に話していくことで、隣の人と輪を作ることが大切だと思う。

(証言者注)

昭和19年3月31日付け文部省通牒(つうちょう)

「決戦非常措置ニ基ク学徒動員実施要綱ニ依ル学校種別動員基準」は師範学校オヨビ中学校ハ大学専門学校文科ニ準ジテ、「通年動員トシ高学年ヨリ順次コレヲ行ヒ、作業種目等ニヨリ、作業効率ヲ低下スルコトナキ場合ハ循環交替ヲ考慮スルコト」トシ、出勤先ヲ「食糧増産、国防施設マタハ工場、事業場(輸送ヲ含ム)等ノ作業トシタ。マタ、特に女子ノ学校ニツイテ、「可及的

学校施設ヲ工場化シ、ソノ学校ノ生徒ヲコレニ動員スコト」、「出勤ハ通勤ヲタ手前トスルモ宿舍ノ完備スル場合ニ限り教職員付添ヒノ上宿泊勤務セシムルコトヲ得ルコト」などを定めている。この資料によると、当時、女子師範学校が「学校工場」にされていたことや、泊り込みで 3 交替の勤務をしていたこと、それが文部省の命令であったことがわかる。

師範学校でお金が支給されたのは、女子といえども、軍隊に準じて活動させる官費の学校であったからである。卒業しても必ず教職に就くという責任もあった。

三橋保さん証言（7 歳、小学校 1 年生、旧千葉市蘇我町 1 丁目）

1945 年 6 月 10 日の空襲の日、私は自宅にいた。家族構成は祖父母、両親、叔母、兄弟と 8 人であった。祖父は半農半漁を業としていたが、父は千葉市寒川の朝日造船の会社員であった。空襲当日、父はすでに早朝家を出ていた。7 時過ぎごろ警戒警報つづいて空襲警報になった。私は家の廊下の下に設けてあった防空壕に弟を連れて避難した。防空壕に入る前に B29 が東の方向から飛んで来るのが見えた。残りの家族も防空壕に入ったと思われる。まもなく空襲になった。近くに落ちた爆弾で、あたりが夜のように真っ暗になった。砂埃が空を舞ったのである。しばらくして、外へ出てみると、私の家は壊れていなかったが、隣の藁葺きの屋根が爆風で私の家によりかかっていた。至近弾は 10m 程東にある私の母の実家（高橋初太郎宅）を直撃した。250kg 爆弾の爆発により、防空壕に避難していた妻、子ども、母、妹ら 6 人が即死した。私の筋向いにあたる高橋三之助宅では本人と妻が亡くなった。私の裏の高橋広吉宅では本人が亡くなった。

私は空襲後、まだ空襲の再来を恐れて 1 人で中宿通りを旧蘇我小学校（現蘇我中学校）の方向に逃げた。学校にはしっかりした防空壕があったことを覚えていた。途中、小学校の上級生が彼の畑の防空壕に入れてくれた。やがて、空襲警報が解除されて家路についた。途中、近くの田んぼに竹に赤い布切れ（ハンカチ大）をつけた赤旗竿が 10 数本立てられていた。良く爆弾は見えなかったが、田んぼに落下した 250kg 不発弾の目印であった。家が見えるところに来ると、向かいの中台製麦工場から出火しており、我が家に延焼しているところだった。この火災で、工場の周りの数件が焼失した。爆弾による破壊による死者の発生と火災による焼失という 2 重の災難が突然襲った。家族に会ったら、事態はさらに深刻だった。

父が出勤途中、蘇我の空襲を見て急いで自転車で引き返してきた。父は警防

団員であったので、空襲の際には、地元町内の警戒、救助等の任務があった。爆弾が投下されているさなかに戻ることは危険であった。父の近くで爆発した爆弾の破片が、父の右肩から入り、右の太ももを貫通した。叔父さんが、父をリヤカーに乗せて千葉の病院に連れて行った。しかし、治療も薬もなかったので、少ししてから、叔父さんがさらに、父をリヤカーに乗せて古市場の武田医院に連れて行った。しかし、ここにも治療する薬もなく、傷口は化膿して 9 月 29 日ついに亡くなった。黄疸を併発していたので病名は黄疸となった。享年 29 歳であった。私は突然家を失い、父を失って、大きなショックを受けた。

空襲後、10 数体の戦災死者遺体は蘇我比咩神社から北東に伸びている中宿通りに戸板に乗せて並べられていた。遺体の状況は怖くて見ていない。この空襲とは別に、P21 艦載機の機銃掃射を受けた。下校時、空襲を避けるために中宿通りを使わず、表通りを他の子どもたちと歩いていた。急に後方から爆音が聞こえ、同時に「ダダダダダーツ」と機銃の音がした。私はとっさに田村さんの家に飛び込んだ。この機銃掃射では犠牲者はなかった。田村さんは私に布団を被せてくれた。米軍艦載機は明らかに子どもや婦人を含む人を攻撃の対象としていた。戦後、機銃の薬莖（やっきょう）が真鍮製であったので拾い集める人もいた。

空襲後、蘇我町 1 丁目の空襲を免れた祖母の実家（高橋宅）へ家族は移った。戦後、千葉市誉田の伯母の家にお世話になった。祖父母はそのまま蘇我町 1 丁目に残った。戦後、片親の子どもは就職差別された。私の家は半農半漁であったので、中学校卒業したら祖父の仕事を手伝うため、高校進学は諦めなければならなかった。父が生きていたら……。

戦争は絶対あってはならない。今の平和に感謝したいと思う。

星野宏子さん証言（5 歳、千葉市矢作町）

私は、履物店の長女として、千葉市矢作町に生まれた。亥鼻台と都川にはさまれる地区である。近くに水源塔があり、その下の水源橋が家の 3-4 軒先に架かっていた。家族構成は両親、私と妹二人、弟の 6 人であった。父は下駄職人で、桐材を会津や八街から仕入れて下駄を作っていた。戦時中は、父が日立航空機軍需工場に徴用され、自転車通勤していた。父は、航空機部品の検査を担当していた。だから、履物店の営業は事実上できなかった。7 月 7 日の空襲以後は下駄を買う客が激減した。母は、父が作った下駄をもって行商していた。子どもたちの昼食はイモ類だったと思う。

父が徴兵されなかったのは、ぜん息持ちであったからである。発作が起こる

と、戦闘ができないからである。家族にとっては、父を戦場に送らず、戦死の危険から逃れられたのは幸せであった。しかし、父も母もそんな感想は漏らさなかった。

隣の家は、父が出征していたが、子どもが数人いたので、母親は乳児にあげる母乳も事欠いていた。重湯を上げていたようだが、米も配給制度で制限されていたから苦労されたと思う。子どもたちの衣服が十分でなかった。

私は、直接に爆撃機を見たこともないし、空襲警報を聞いたこともなかったが、母が「空襲警報だから、防空壕に入りなさい」という声に従っていた。空襲警報で防空壕に入ったのは2回である。実際は、防空壕に入る前に、押入れに入った。危ないときはそこから防空壕に移った。空襲時に押入れが安全であろうはずがないが、押入れが身を守ると思っていた。防空壕は都川の土手に勾配を利用した供用のもので、10人程度を収容できた。奥には布団がたたんであった。

1945年7月6日の夜半、起こされた。母が「空襲警報だから、子供たちは防空壕に入りなさい」と指示しながら、母も入った。壕内には、6-7人がすでに退避して。女性がほとんどであった。この日は、父は日立航空機で仕事をしなければならなかった。父がいないのは不安であった。私は、空襲のさなか、防空壕からしばし飛び出したところ、千葉市中心街空襲の火は、水源塔の壁を赤く染め、縦長の窓に業火の火を写した。ガラスの反射で千葉空襲の規模を知ることができなかった。しかし、火の粉は飛んで来なかった。壕の中から外の動きを見ると、布団を被って町の方に逃げる男性がいた。後で、聞いた話では数発の焼夷弾が都川の土手に落下したが、不発であったらしい。私達子どもは恐怖心が募ったが、防空壕内で眠ったらしい。

翌朝、周辺では空襲の焼け跡は見えなかった。後日、配給の牛乳を受け取りに町に出ると千葉神社あたりはほとんど焼け跡だった。神社の形はなく、石堀は残っていたが、崩れていた。

戦後、矢作町の借家の大家から出てもらいたいと言われ、昔扇屋デパートがあった千葉市吾妻町に引っ越した。ここも焼け野原であった。だから、千葉市の遠くまで見わたせた。父は器用だったので、出身の勝浦から木材を仕入れてバラックの家を建てた。食べ物はないので、母の着物を持って加曾利の農家に行き、米など食料と交換した。母の着物も数がないので、2-3回で交換は終わった。配給された食糧はでんぷん粉のようなもので、米はほとんどなかった。都川の土手にカボチャやサツマイモを栽培した。近所の人も土手を区分けして作物を植えていた。イモは茎まで食べた。

翌1946年、都小学校に入学し、引越しのために本町小学校に転校した。本町小学校は焼けていたので、実際の教室は現在の末広中学校の校舎であった。子

どもの足で、通学時間は小 1 時間もかかった。教室の椅子がないので父が作ってくれた椅子を学校に持っていった。都小学校へ入学する時に近所の仕立屋さんが私のために作ってくれたセーラー服は、かなり薄く透けた生地であった。国語の教科書は墨塗りの本が配布された。購入した記憶がない。お古を使ったのであろう。ノートは紙質が悪く、消しゴムを使うと穴が開いた。鉛筆の芯も硬かった。黒板がないので、貼りあわせたボール紙に墨を塗って代用していた。学校給食は野菜汁と缶詰鮭、粉ミルクで、時々コッペパンがでた。1 年生は下駄で通学したが、2 年生からは運動靴で通学した。

シラミは大変だった。子どもらは頭髪にシラミを持っていた。咬まれるととても痒かった。シラミは髪の毛に卵を産みつけた。頭を洗えばいいのだが、石鹼が不足していた。シラミの卵を除去するために、櫛の間隔が細かい櫛（当時、これを梳櫛と言った）もあった。また、酢を薄めて洗えばいいと言われていた。普通の子どもらは週に 2 回ぐらいしか風呂にも入っていなかったから、下着も不潔にちがいない。一度、学校の校庭にクラスごとに集合させられ、頭から DDT の粉末をスプレーされた。

千葉市矢作町にいた頃、進駐軍の兵隊がジープに乗って家の近くに来た。2-4 人のアメリカ兵はジープに乗ったまま、子どもらにチョコレートやチューインガムを投げた。子どもらは黙って食べていた。この間、数分間で、兵隊はジープから降りて来なかった。

ぜん息持ちの父は 82 歳まで生きたが、ぜん息で死んだ。考えればぜん息が父の命を救ったのかもしれない。叔父は南洋サイパン島で戦死した。

もう、戦争は 2 度として欲しくありません。世界中で今も戦争しているが、日本の憲法 9 条が世界に拡がり地球規模での平和が実現することを願い、微力を尽くしたいと思う。

中村昇さん証言（20 歳、工場労働者、千葉市椿森）

1945 年、当時の家族構成は中風で寝たきりの 61 歳の父親、長兄の 25 歳の嫁とその 2 歳になる息子、私の 4 人暮らしであった。

長兄は、1943 年春召集され、一宮の第 12302 部隊に入隊、後日に聞いた話では秘密部隊で気球爆弾を打ち上げる部隊であったそうな。千葉一宮海岸と茨城水戸海岸の 2 箇所気球爆弾の発射基地があった。冬季、千葉・茨城上空をジェット気流が流れ、米国の西海岸に到達する。その気流に気球を乗せ、米国まで流すのだ。真冬の夜中の任務は寒くてウイスキーか焼酎でも呑まなければやっていられない。どこかから誰かが差し入れてくれた酒を呑みながら気球を上

げていたと言う。任地に着任前、陸軍歩兵学校の演習場（現スポーツセンター）で毒ガスの暴露訓練で死ぬ苦しみをさせられた、あんな苦しい実験は二度と御免だと言っていた。秘密部隊が毒ガスを受けた時どれだけ耐えられるか、と言った実験だったそうだ。除隊後、長兄は体調が悪く、1949年36歳で死亡した。

次兄は、1941年春、赤羽工兵第14連隊に入隊、北支、中支、南支と転戦、1943年上海からインドネシアへ、さらに赤道直下のハツマヘラ島（はぼ四国の大きさ）に送られた。1946年5月栄養失調のむくんだ体で名古屋港に上陸して生還した。その兄も4年前に亡くなった。85歳であった。

私は、1939年（昭和14年）3月、千葉市高等小学校卒業（現葛城中学校）、やたらに生徒をぶん殴る先公（あだ名はキューリ）から解放されて千葉市街から町はずれの穴川町の小さな民間の軍需工場、内外製鋼所に就職した。会社は当初約100人の従業員であったが、終戦時には500名に膨れていた。私は、肺を患っていたので徴兵検査では丙種合格となり、兵役免除となっていた。工場では、ゼロ戦、重爆撃機のピストンピン、掃海艇の敷設機雷のワイヤーロープを切断するサメの歯のような刃物、機関銃の薬莖、各種砲弾ゲージ等々を制作していた。

「贅沢は敵だ」「欲しがりません、勝つまでは」「滅私奉公」「神風が吹く」等の雄叫び調の標語の甲斐もなく、1945年（昭和20年）に入ると都市部の空襲は激しさを増し、特に3月10日の陸軍記念日を狙った東京大空襲はすごかった。B29の大群が低空で（300から500mか）千葉市出洲海岸から東京江東区方面に次から次へと飛び去っていく。東京の空は真っ赤に燃え、千葉市は真っ暗闇。千葉市上空を飛ぶB29の飛行帽をかぶった操縦士の顔が東京の燃える光を受けて影絵のように映し出される。

一夜明けると毛布やオーバーをかぶり、炭窯から出てきたように顔を真っ黒にした一団が家の前の総武線の線路を四街道方面に幽霊のように歩いて行く。椿森陸橋から先の線路の両側はのどかな冬枯れの田んぼが広がっていた。その風景によりやく気付いたのか、東京方面にゆっくりとバックして行く。彼らは当てもなく歩いていたと思う。私たちもその日食べるのがやっと、何もあげることができずただ呆然と見ているだけだった。

千葉市もいつかやられる、その時は千葉神社の東の鳥居に巷では左甚五郎作と言われる国宝級の鶴の透かし彫りを梯子と鋸一丁持って、ひそかに持ち出そうと思っていた。やがてその日が来た。七月七日、七夕空襲と言われるその夜だ。運悪くその日は会社防衛のための夜警の当直の日にぶつかってしまった。

当直は十二から十五人ぐらい、夕食を会社の食堂で済ませた。食料品倉庫から誰かがアメリカ製の船員用固形コーヒーを見つけ、それを削って砂糖なしで飲み三々五々所定の持ち場についた。私は青野という千葉寺から来る後輩と工

場門前の守衛所の防空壕に入り、二人で将棋を指していた。

9時過ぎ B29 が一機飛来した。また東京方面に行くのかと思っていたら千葉市上空を旋回し始めた。そして突然カラン、カランと乾いた大きな音がした。二人は壕内で伏せた。青野が大声で「中村さん、目と耳をふさぎ、口を大きく開けるんだよねえ」と言ってきた。ああ、青年学校の教官が教えたことを叫んだのだ。「青野、そんなものは気休めだ。役に立たねえぞ」しばらく耳を澄ましそして表に飛び出した。すると第五工場の屋根が火を吹いているではないか。皆そこへ駆けつけ梯子を掛けバケツリレーで訓練通り水をかけ消し止めた。工場に落ちたのはその一発だけ、米軍は都市の外側を攻撃、内側に住民を集め被害の拡大を狙ったのだ。焼夷弾そのものは自転車のパンク糊にガソリンを加えたもので、怖がらずに水をかければすぐ消えるものだ。後で最初の大きな音の正体を調べたところ焼夷弾を束ねる大きな空のケースが分厚く野積みされていた鋼材の上に落ちた音だった。やれやれ、爆弾でなくほっとした。もし爆弾だったら近くの守衛所は吹き飛んでいただろう。

工場から 4-5km 南東、市中心地の空は真っ赤に燃え、竹やぶがわさわさと揺さぶられるような異様な音、パンパンと何かが破裂する音が聞こえる。市街地への爆撃は間断なく続き、西千葉にある東京大学第二工学部（現千葉大西千葉キャンパス）の何棟かに火の手が上がり消しに行こうかと相談した。だがノモンハン帰りのモサ、林丑松職工長が「危険だ。やめておけ」と中止になる。

焼夷弾は蜂の巣のような八角形の大きなケースの中に 30 数本束ねられそれが空中で分裂、一個は長さ約 40cm、直径約 7cm、それぞれの上部に約 30cm の細切りにした厚手の綿布が数本取り付けてあり、それに火がついて回転しながら落ちてくる。戦国時代、夜、牛の角に火のついた松明を付け、敵を怖がらせたのと同じか……。B29 一機から何百、何千落とすのか知らないが、竹藪がわさわさ揺さぶられるような音は焼夷弾が落ちてくる音なのだ。

空からの攻撃に手も足も出ず一睡もできずに夜が明けた。六時過ぎ朝食を済ませ歩いて家に向かった。穴川、作草部、椿森の軍用道路は片側一車線と狭く、住宅は右も左も虫食い状態に焼け、煙で目も開けられず、熱風で呼吸困難になる。やむなく軍隊の練習場（現千葉市営競輪場）の原っぱ、軽便鉄道側に出てようやく椿森陸橋下の我が家に辿りついた。

家は丸焼け、がっくりする。留守宅を守る長兄の兄嫁が幼い甥をおんぶして、中風で寝込んでいた父親と二人でどうやって運んだのか、ほとんどの家財道具が家の前の空き地に出してあった。親父さんは紺の警防団の服と帽子に頭陀袋を十文字にかけ、すっくと立っているではないか。中風で寝込んでいたはずの親父、火事場のバカ力で病気が治ったのか？後で聞いた話では千葉神社近くで喫茶兼和菓子屋を営む親戚のおかね婆さまも中風が治ってピンシャンしている

そうなの。空襲ショック、生きる、の一念で直ってしまったようだ。

陸橋下で焼けた家は、伊藤、伊田、笠原、夏海さんと我が家の五軒、先隣りの下島、鈴木さんの家は間にドブがあり、一段と低く両家の旦那が必死で水をかけ類焼から守ったと言う。我が家の裏の伊藤さんの家に焼夷弾が直撃、国鉄職員のやさしい旦那と奥さん、幼い女の子二人は必死に逃げで無事だった。伊藤さんの裏は高い土手で家の燃える熱風が南風に煽られ、その逆風で私の家は類焼した。私がいれば、絶対消し止められた、返す返すも残念至極。千葉神社の鳥居も全焼、これで国宝級の透かし彫りを失い千葉市の文化的財産の損失だと思った。

「お義姉さん、鉄道連隊は機関銃ぐらい撃ったのかい」

「とんでもない。逃げろと言う命令だって皆この辺をうろうろしていたよ」

「ええっ、軍隊が逃げろ？火も消してくんねえのかい？」

「うん・・・本土決戦に備えるためだって・・・」

「ふうん・・・？」

何だか分かったような分からない話であった。

幸い長兄の自転車が健在なので早速、千葉駅方面を探索した。くすぶっている町中の焼け残った電柱に等身大の伝單が貼られデカデカと

「これが戦争だ。本土決戦はこれから！」と書きなぐってある。

「今朝（右翼の）地下水脈と言われる連中がやったのだ。すげえ連中だ！！」

中心街の栄町方面は熱いのと煙でとても入れない。踵を返し要町、椿森坂下から左、荒木山（現千葉公園の小丘）方面へ、小学校からの仲の良い友達、やんちゃんの家は残っているか？ここも熱い、煙い、目をしかめ、道の真ん中を息を殺して走る。突然何かに乗って急ブレーキで止まる。

ああっ・・・。炭化した子供をしっかりと左手に抱いたお母さんのおなかの上に乗ってしまっただけで、母子は仰向けになって倒れていた。私の自転車は、母親の足元から腹部に乗ってしまっただけである。私は、冷や汗が出た。申し訳ない。「ごごご免なさい・・・。見えなかった・・・。」このシーンは何かにつけて今でも思い出す。それにしてもあの親子、坂上に逃げようとしたのだろうが、旧道椿森の坂の中段にあった時田の床屋も燃えているので退路を断たれ、公園方向に迷い込み、あと 30mか 50m進めば助かったのに。土地勘もなかったので無残な死に方をしたのだろう。

坂のほうから右側は十数メートルの丘、その土手っ腹に大きな防空壕があり、南側の家並みは丸焼け、南風にあおられてその防空壕(幅約 2m、奥行き約 10m)に避難した二、三十名が蒸し焼きになった、と後で聞いた。当時、防空壕が突貫工事であちこちに掘られた。親子はその防空壕前で倒れていたのだ。

当然、やんちゃんの家もなかったが、こんこんと湧く浅井戸に飼われていた

黒っぽい鮎がなぜかカーキ色になっていたのも不思議であった。

さて今夜はどうするか、家もなく野宿か。するとお義姉さんから声がかかった。どこから聞いたのか「あんちゃん、今井町は焼けてない。知り合いのあんこ屋に行って大八車を借りてきてくんない」「はい」。お義姉さんは25歳であった。今井町まで焼け跡を右往左往しながらたどり着き、大八車を借りて帰ってきた。家財道具を山と積んでお義姉さんの実家、金親町へ、途中五十がらみのおっさんが一緒に大八車を押してついて来るではないか。

「おじさん、何のまねか知らないが、ついて来てもおじさんの分の食べ物も着る物もねえよ」すると「いいんだ。おれは何も望んでねえ」
変なおっさんだ。金親町まで付いてきた。あの大草の長い急坂を懸命に押し付けて助かった。「あんちゃん、あのお父さんに一円もやるかい?」「一円じゃ不満でいつまでも帰らねえよ。二円五十銭やりなよ」二円五十銭やったらそれを握って消えた。やれやれ。

あくる日から会社へ片道八 km 近い道を毎日通った。ゼロ戦のピストンピンの端面研磨用治工具作りで忙しかった。

八月十五日、会社は電休日休みだった。電休日とは月月火水木金金の1週間で電力を万遍に平均化するための措置であった。当時、電力も配給制で、工場ごとに休日の曜日が定められていた。内外製鋼は、電休日が月二日あったと記憶している。

私は椿森の焼け跡からトタン屋根などの残骸をかき集め掘っ立て小屋を建てるつもりで、先隣の洋服仕立屋、白石のお父さんに相談に行ったら、今日お昼の十二時にお天ちゃんの放送があると言う。彼は、天皇を愛称で呼んでいた。

「戦争は終わるのかなあ。負けたらお天ちゃんがかawaiiそうだな」と言った。

「そうだねえ。俺たちはいいけど」と私も相槌を打った。放送に間に合うよう義姉の実家の金親町（現千葉市若葉区）に帰り、放送を待った。

十二時まで艦載機が横浜、横須賀の軍事施設の上をブンブン飛び、機関銃を撃ちまくっていた。天皇の放送の始まる15分ぐらい前まで飛んでいたが、理由はわからない。（空からやって来る音は遠くからであっても聞こえるものだ。木更津の花火の音が千葉で聞こえることもある。だから、横浜の艦載機が撃ちまくるバリバリバリと空気をつんざく機銃の音は聞こえた。）

後で聞いた噂によると、まだ一度も本土空襲に行っていない飛行士に好きなようにやらせたと言う。なぜなら戦争しないで返したら本国に帰って荒れるからという話であった。

放送は聞き取りにくかったが、「世のために泰平を開く」のくだりだけは良く聞こえた。ああ、戦争は終わったのだ。その夜、明るい電灯の下でめしが食べ、生きていることを実感した。8月17日、全従業員が集合させられ工場への徴用

は解散となった。戦争に負けた腹いせで測定器や工具類を鞆に詰めて持ち帰る者や、静かに泣いている者や、今度アメリカと戦争するときは絶対に負けないと戦争に反省しない者もいた。

米軍を始めて見たのは、東金街道を銚子方面に向かう幌付大型トラックの運転台と助手席にいた米兵はガムを噛みながら、ニコニコして走っていった米兵であった。あれが、怖がっていた鬼畜米英かと思った。鬼でも蛇でもなかった。

椿森の同級生は皆、不幸であった。蒼田の後輩 5 人は志願して、中国の上海上陸作戦で失敗して全滅したらしい。1 人は自殺した。とにかく戦争は人間関係をバラバラにした。情報網もなく今の便りだけで戦後会っていない人はたくさんいる。（「七夕空襲と炭化した母子」）

（編集委員注）

内外製鋼所ホームページにおける沿革によると、現在ナイガイ株式会社と改名されている。昭和 9 年 3 月東京都砂町・船堀において内外製鋼所を創業、圧延・製鋼事業を開始。昭和 15 年 12 月千葉工場を建設し、建設・自動車・航空機用精密部品および工具類の製作を開始。昭和 20 年 8 月圧延・製鋼事業を廃止し、千葉工場を中心に主として自動車部品等精密部品の製造を行う。

三橋とみ子さん証言（20歳、師範学校、寮生、千葉市）

私は茂原市の農家に生まれ、両親、兄弟妹と私の6人家族であった。父は神道の勉強をするために伊勢神宮の皇学校を修了していた。慶應生まれの祖母は教育熱心であったその影響で、私と妹は千葉師範学校女子部に入学し、共に教職の道を歩んだ。弟は農業学校に進学した。兄は南洋の戦場に出征して、戦後、乞食のような姿で無事復員した。母はその軍服を大切に取っておいた。私が小さいころ、1936年の2.26事件が起こった。青年将校がクーデターを起こして閣僚を暗殺した、結局反乱軍と認定され処刑された事件で、当時の新聞では帝都不祥事件と報道された。私の校長先生の息子がその中にいたので、町中の噂になった。当時小学校では、4大節があった。1月1日四方拝（新年祝賀）、2月11日紀元節、4月29日天長節（昭和天皇誕生日）、11月3日明治節（明治天皇誕生日）には生徒全員が講堂に集合させられた。校長先生が白手袋で教育勅語を読み上げるのである。「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト」を聞くときは最敬礼の姿勢で、それが過ぎると少し上半身を起こしていいが、まだ前かがみ姿勢である。「御名御璽」と終わるころには、垂れていた鼻汁を一斉に啜る音がした。でも子どもたちは、その後に配られる紅白饅頭を楽しみにしていた。

師範学校は富国強兵の国策を推進する根幹であった。海軍には海軍兵学校、陸軍には陸軍兵学校、教員には師範学校があった。だから師範学校は軍隊調の厳しい指導の日々であった。まず、全寮制で、組織的に編成された集団行動が基本であった。当時、師範学校女子部への道は、高等女学校から本科（2年）へ入学するか、小学校高等科から予科（3年）と本科（2年）へ入学する方法があった。私は、1941年に予科に、1943年に本科に入った。寮生活は、起床6時、清掃、ラジオ体操、朝食、8時授業開始（授業時間は1日6-7時間）、強制的部活動、夕食、自習時間、消灯10時であった。食事は配給制の時代であったが、米が多かった。舎監長の先生は、生徒たちにひもじい思いをさせないように食糧を確保するのに大変な苦勞があったと戦後話された。制服は家庭科被服の実習として裁断から製縫まで行い、着用した。

授業科目は、基本教科、選択教科、修練に分かれ週40時間が課せられた。修身公民、国語、漢文、歴史、教育、児童心理学が重視された。特に武道、教練も重視された。歴史には、国史、東洋史、西洋史があった。西洋史の授業に人気があった。西洋美術の紹介が好きだった。ある日、まじめな学生が質問した。「先生、兵隊は戦場で死ぬとき『天皇陛下万歳』と言いますか？」と。先生は、暫く考えて「僕にはわかりません」と回答した。この教師は、東大を出た先生で、戦争中読めない本を油紙に包んで家の庭に埋めて、戦後になって、湿った本を掘り出して生徒に貸してくれた。英語教科は3年生の時に廃止された。担

当教師は退任式もなく、学校を去って行った。この教師はレオナルドダビンチが偉大な宗教家であり、偉大な芸術家であり、偉大な哲学者であると教えた。シャーロックホームズの学習も取り入れて指導してくれた。私は西洋の文化に関心を持っていたようだ。

部活動は、文化部はなくバスケットボール、バレーボール、陸上、弓道の体育部だけだった。当時の師範学校は「できないことは許されない」、「全教科できるようにして卒業させる」と言う方針であった。現在は人間の多様な存在のもとで、長所を引き伸ばす教育からすれば、師範学校の教育は欠陥教育であったのではと思われる。それがまた長所でもあった。本科を卒業して、千葉県本科正教員の免許状が取得できた。千葉県の学校に就職するためには、千葉師範学校の免許状がなければならない、仕組みであった。

1941年12月8日、米英戦争が開始された日、舎監の先生が生徒を集めて、大東亜戦争の正当性を説き、「大日本帝国万歳」と叫んだ。当時は「アメリカは持てる国」「日本は持たざる国」と言いながら侵略戦争を合理化していた。私は、持てる国と戦争して勝てるのかなと素朴な疑問を持った。

1943年10月21日、出陣学徒壮行式が降りしきる雨の中、神宮外苑競技場で举行された。私達は、傘もささず日の丸の小旗を振った。学徒は銃を捧げ、水浸しのグラウンドを行進した。この式で、東条英機陸軍大臣兼首相は金切り声で「諸君はお国のために・・・」と演説した。この学徒たちは直ちに戦地に送られ、帰らぬ人が多かったと聞いている。

女子部の学徒勤労働員は1945年1月から実施された。本科2クラス、予科1クラス総勢約120人が学校の寮から、千葉市蘇我地先の埋立地にある日立航空機の軍需工場に動員された。汽車で向かうが、石炭が不足する日は、汽車は走らず、私達は駆け足で通ったこともあった。工場に入って驚いたことは、労働に従事しているのは老人とアンちゃんと言われるような男子であった。私たちの目で見ると「ぶつたるんでいる」と映った。これが軍需工場か、これで戦争に勝てるのかと思った。壁に大きな赤旗が下げられている理由を聞いてみると赤旗はノルマを達成しなかったから、注意を喚起させられているらしいと。私たちの仕事は、航空機の発動機（当時はエンジンという敵性英語は使えなかった）わずかな熟練工が指導に当たっていた。組長は穏当な人であるが、その上に配属将校がサーベルを下げて見回りをしていた。働いている人たちは、後ろに見回りが来る時は、身を引き締めているが、見回りが去る若い工員たちの気持ちがゆるんだようだった。工場の食事はひどかった。埋立地の砂が舞う食堂にはヨシ簾が張ってある。サツマイモの蔓（つる）の佃煮とおにぎりが一つである。食べる時間には砂がおにぎりの上にフリカケのようにのっていた。それでも空腹だから食べた。お茶はでない。水道の蛇口で水を飲むだけだ。

日立航空機への動員中空襲はなかったが、偵察機が何回も上空を飛び、その都度空襲警報が発令され、私達は鶉の森（大巖寺）まで退避した。

1945年4月から、工場への動員が中止になった。アツと言う間に、家庭科教室と工作室の床がはがされ、コンクリートの基礎ができた。学校に工作機械を搬入されて学校工場が稼動した。教師たちは、当初、生徒に授業ができると喜んだらしいが、授業はできなかった。学校工場は24時間3交代制勤務となった。7時から15時、15時から23時、23時から7時のシフトである。8人1組の寮生は3交代に合わせて再編成された。エンジンのピストンを製作する仕事である。鋳物製のピストンアームをフライス盤で荒削りし、最終的に0.1mmの精度で研磨して製品にする。おかげでノギスやマイクロメーターの使用方法を習得した。この限度をこえるとオシャカになった。班編成はクラスを身長順に4班に分け、身長の高い班は力が要る仕事についていた。この班は分隊と呼ばれた。学校全体が大隊で、学年が中隊で、クラスが小隊と呼ばれていた。

毎日の仕事は、鋳物の未加工のピストン部品が学校工場に運ばれてくるので、それを仕上げるのである。戦局がますます不利になると、原料が学校に届かなくなった。私達はそんな時、「今日も手待ちね」と言った。そんな日が目立つようになった。生徒は口にはださなかったが、これでは、戦争に負けるのではと思った。

1945年6月10日、私は朝組みであった。7時にモーターのスイッチを入れるとすぐに、警戒警報のサイレンがウーウーウーと鳴った。続いて空襲警報ウッウッウッウッに切り替わった。そのときはすでにB29編隊の轟音が近づいていた。東部軍管区情報は「マリアナ諸島から発進した敵B29大編隊は千葉市に向かって進行中・・・」と告げていた。いつもの空襲警報には「そこらをうろうろしているうちに解除になるわよ」と言っていたが、今度は違った。私は、急いで機械の電源を切り、防空頭巾を被り、救急袋をひっさげて、長い廊下を疾走して、所定の防空壕へ飛び込んだ。間一髪であった。ドシン、ドシンと爆弾が近くで炸裂している響きがある。体を丸めて耐えていた。私は、当時本校の消火班で、防空壕の割り当ては学校正門の守衛所の脇にあった。爆弾空襲が終わって一瞬沈黙の世界になった。しかし、シューツ、シューツとP51戦闘機の機銃掃射音が聞こえてくる。まだ出られない。やがて、書道の先生が「おおい、学校がないぞう」と言う大きな叫び声が聞こえた。防空壕から這い出してみると、学校はめちゃくちゃに壊され、瓦礫の山となっていた。あちこちから白い煙が出ていた。壕の入り口で「痛い、痛い」という声が聞こえる。退避が間に合わなかった生徒である。彼女はお尻から太ももにかけて肉がえぐられており、白い骨が見えた。私達は「傷は浅い。しっかりしなさい」と励まして、応急措置を施した。校庭の防空壕の前にも数人が倒れている。Sさんは、

Mさんを抱き起こしてみたら、顔がめっちゃめっちゃになっていた。爆風で死んだのだ。Sさんは、P51の機銃で肩に貫通銃創を受けていた。校庭は戦場のようであった。負傷した生徒を校医である外科医に運んだ。外科病院の中も地獄であった。腕がもぎとられた人、足を失った人、頭から血を流している人、目玉が飛び出した人でごった返していた。校医は国のために尽くした生徒の治療を優先すると言ってくれたが、薬は赤チンしかなかった。腹部に負傷した生徒は担架に乗ったままで、「水、水」と言い、最後に「おかあさん」と静かに息を引き取った。私は重傷の友を介護し、また友の死に会っても涙も出なかった。戦争が感情を奪ったのではと思った。2時間ぐらい後に、学校に戻ると、学校は完全に焼けていた。書道室とテニスコートの脇に植えられていた合歡の木がズタズタになっていた。この木は6月頃に花を咲かせるので、夏休みを楽しみにしている生徒が好きな花であった。その夜は、男子部の工作室で東禅寺の住職の読経により通夜が営まれた。その晩、千葉市亥鼻の師範学校男子部寮にお世話になった。男子は動員で借り出されているために、空き部屋があった。ただ、男子寮の部屋は汚かった。夜も空襲の危険があるので、服は着たまま、靴は履いたままで寝た。その夜も就寝中に空襲警報になった。B29が偵察に来たらしい。私達は泣きながら、数人が手をつないで亥鼻台から降りて避難した。負傷した生徒に対して世話役がついた。志方病院に収容された生徒は爆風で全身擦過傷と診断され、全身に包帯が巻かれた傷口に蛆が湧いた。介護に当たった友達は、箸で蛆を取ってあげるしかなかった。この志方病院も7月7日の焼夷弾空襲で焼失し、彼女も焼け死んだ。彼女の母も病院に水をかける努力をしたが、空襲はそれを上回った。この空襲で私達姉妹が無事であったことを親戚の人から電話で実家に伝えてくれたが、誤って二人とも死んだと伝えられていたらしく、母は私達を見てびっくりして喜んだ。

校庭の防空壕に入れなかった生徒の話では、6月10日警戒警報の時点で、すでに防空壕に退避していた教師が防空壕に入ろうとした生徒に、付属小学校の点検を命じた。この教師は空襲警報の意味が理解されていなかった。命が粗末にされた。この時、機銃で肩に負傷した生徒は結局教職につけず、「この教師に不満をぶつきたい」と言っていた。戦争中は、教師に対する不満は禁じられた。戦後も彼女は不満を持っていたが、彼女に抑制するような力が働いていたようだ。最も命を粗末にしたのは、戦争であった。

8月15日は暑かった。茂原航空隊では飛行機が飛んでいた。天皇のポツダム宣言受諾放送は茂原市の実家で聞いた。戦争に負けた。これだけお国のために尽くしたのに負けたことは悔しかった。半日泣いた。夜になると、電気が明るくついて、その下で家族ともに食事ができて、初めて平和のありがたさを実感した。1945年9月、四街道の野戦砲学校の跡地に移転した。学校が破壊・焼失

したので、学校は千葉県四街道の野戦重砲連隊の兵舎を借りた。授業はなく、ただ学校・教室整備の労働が続いた。卒業を前に、生徒の中に、もっと勉強をして卒業したいと言う声が強まり、留年運動が起こった。卒業を延期する運動だった。学校側は、県下の学校では男性教師が出征しており、教員不足は大変な事態だから、不満があっても卒業して欲しいと逆に訴えられて運動は終わった。いよいよ卒業の時、東大から民主主義を専門とする海後宗匡教授が見えて二日間講義をした。「大衆の意見に基づいて、大衆の力で政治を行う」と言うような講義であった。

今、アジア太平洋戦争は侵略戦争でなかったという意見が政府の高官の口から出てくる。また、自衛隊のイラク、アフガン、ソマリア派兵は戦争の準備であると思う。

私は、1977年（昭和52年）3月、教職を辞した。12年程前から紙芝居や配給食料品の見本、空襲の現場図面などを用意した。配給の見本は「玄米一人一日330g、砂糖一人1カ月150g、塩同200g」と書いた袋に詰めて見せる。年に数回学校を訪問して、空襲・戦争の語り部活動を続けている。最近は、加齢からの衰えが目立つが、健康である限り、この活動を続けたい。ある学校で、私の話を聞いた児童の感想文の中に、1人の男子生徒が「僕は、これまで戦争はカッコいいものだと思っていたが、先生の話聞いて、戦争が残酷で悲惨であることを知りました」と書いてくれた。この感想はとても嬉しい。子供たちには、「戦争は理不尽である、正しい理由がない」、「食べるものがない、英語の授業も禁止される」と教えている。飽食の時代の子どもは「先生、米がなくても、パンがある、うどんがある」と質問してくる。「何もない」と答える。

私は退職後世界を旅行した。各地で戦争の犠牲の戦跡を見た。日本は犠牲の戦跡が大切にされて引き継がれていないと感じた。1967年（昭和42年）、宮内三朗市長のとき師範学校女子部の跡地に犠牲者を慰霊する祈念碑を建てたいと要望した。市長は苦い顔をして、三つの条件を出された。それは、①抹香臭いものは建てない、②政党色はださない、③高さは1mを超えないというものだった。私達はやむなく3条件を受諾した。そして、1968年（昭和43年）千葉大学教育学部同窓会にお願いし多額の浄財をいただき、女子師範学校の諸姉よりも賛同をいただき、同窓会のよりどころとしての記念碑と亡き師友の霊を慰める祈念碑としての碑が1968年建立された。祈念碑の下には、「永年の平和を祈り、亡き師友の霊に捧ぐ」と刻まれた慰霊牌が納められている。毎年千葉市役所主催と教職員組合主催の千葉市戦跡を巡る会が行われている。その際に、この祈念碑と慰霊牌の由来について説明を続けている。

